

### 第二節 財部土持氏の滅亡

日向平定の  
下知狀

伊東氏は、島津氏と和してより、邊疆暫く事なきを得、國內太平を謳歌し、或は寶徳元年妻萬宮つままんぐさ ○應永二十四年上棟の修造をなし、或は連年犬追物の遊技を行ひ、土持一族をも招きて共に之を樂み、表面頗る無爲の體なり。然るに、寶徳三年、祐堯、將軍義政の下知狀を得るに及び、是より日向平定の雄心鬱勃として禁する能はず。先づ土持氏と絶ち、之を伐ちて次第に戦定の功を成さんとす。土持氏は、日向に於ける舊族中の最なるものにして、縣あがたを本宗となし、財部たからべ、大塚おほつか、清水しみず、都於郡とのくり、瓜生野うりふの、飢肥うぶ等所謂土持七頭あり。曾て國內に於ける一大勢力なりしが、その後一族次第に凋落し、今や残る所僅に縣、財部の兩土持のみ。由來、伊東氏は、土持氏と締盟し、常に緩急相援ひ、以て島津氏の侵寇に備へ、祐立祐堯に至り、婚を土持氏に結び、緝睦殊に深かりしが、茲に至りて遂に和せず、干戈相見ゆるに至る。康正二年十月二日、財部城主土持景綱、縣城主土持宣綱と相牒し、伊東氏を撃たんとし、宣綱先づ中山○縣に在りより出で、南下す。祐堯之を聞き、亦、兵を新納に進め、火を目白○或は根白に作るに縱ち、毛作原けづくりはらに景綱と會戦して大に之を破る。土持金綱、里岩備中守以下死するもの甚だ多し。景綱遂に力屈し、和を請ふ。祐堯乃ち之を許す。世に之を小浪川の役といふ。

小浪川役

財部城陥る

然るに翌長祿元年七月、和再び破れ、祐堯大舉して財部を攻む。縣土持氏之を聞き、新名甲斐守以下、富山、海田、大貫等の諸將を派して財部を援はしむ。祐堯銓はちくはに陣して之を邀へ撃ち、先づ小浪川に景綱を斬り、尋いで、新名甲斐守以下斬獲する所甚だ多く、北ぐるを追うて財部城に迫る。九月十二日に至り、城兵遂に城を致して降る。祐堯、乃ち、落合兼續をして之を成らしめ、その十邑財部、高城、日知屋、鹽見、門川、新名、野別府、山陰、田代、神門を併有す。かくて財部土持氏茲に滅び、僅に一の縣土持氏を残すのみとなれり。この後、祐堯の子祐國に至り、彼の第一飢肥役戦捷の餘勢を以て、縣土持氏をも滅せんとし、文明十七年二月祐國弟祐邑と共に軍を臼杵に進む。土持氏の兵善く拒守し、終に縣城を抜く能はず。乃ち野別府城を修築し、八代駿河守を留めて還れり。かくて國內第一の舊族土持氏も、次第にその枝葉を断たれ、勢力日に蹙まり、伊東氏獨り全盛を謳歌するを見る。

### 第三節 伊東祐國の飢肥進撃 第一第二飢肥役

伊東氏既に財部土持氏を滅し、兵勢益々張り、漸く力を外に用ひんとす。島津氏之を憂ひ、



鳥津氏の警

長祿二年、忠國、新納忠續に飢肥城を授け、其の地に在りて救仁院を兼ね領せしめ、同三年夏、忠國又、弟有久○久豊の四男をして莊内梅北城を守らしめ、竊に伊東氏に備へたり。

その後、寛正五年四月九日及び十日、鳥津立久○忠國の子、伊東祐堯及びその子祐國と鶴戸山坊○今、南に會盟し、疆域を定め、祐堯の女を娶ることを約し、越えて文正元年、立久、復、祐國と櫛間に會して犬追物の戯技を行ひ、只管和親の體を示す。

文明二年正月二十日忠國歿し、立久繼ぐ。尋いで同六年四月立久歿し、子忠昌○當時繼ぐに及び、

同年八月、忠昌立久の弟久逸を薩摩國伊作○伊作より徙して日向國櫛間院地頭となし、益々邊疆の

守備を嚴にす。翌七年二月二十三日、忠昌櫛間に赴き、久逸の邸に臨み、三月四日、飢肥

に抵り、新納忠續○當時の弟に蒞み、同じく十二日、更に忠續の領邑にして要地たる志布志○當時

に抵り、二弟是久、忠を巡り、是月下旬、鹿兒島に歸る。蓋し邊疆戒嚴の意に出でたるなり。是より先

文明三年十月、立久、五代友平を京師に遣はし、その國役を免せられんこと、及び伊東氏

に代りて日向を總管せんことを請ふ。以て鳥津氏の日向に對する野心の深甚なりしを察す

べし。

當時、鳥津氏は、伊東氏の外に、眞幸院○眞幸院に關して球磨の相良氏とも事を構へ、内外甚だ多

端なり。眞幸院は、吉田、馬關田、飯野、加久藤、小林五郷の總稱にして、古來日下部氏之を

鳥津氏眞幸

日下部氏

北原氏

領し、鳥津忠久入國の時、眞幸十郎○日下部重兼あり。世々相傳へしが、その後、肝付兼俊の弟北原兼幸代りて之を領し、相傳へて範兼に至る。應永二年、範兼相良祐頼を徳滿城○加久藤村に在りに饗し、事を論じて合はず。相刺して共に死す。是より、北原、相良二氏相好からず。範兼の子

久兼、鳥津元久に降りて援を乞ふ。元久相良氏の兵を追ひ、眞幸院を擧げて久兼の有たらし

む。是よりして北原氏は、世々その邑を有ち、貴兼に至りて更に吉松、野尻、栗野の諸城を

併有す。會、文明七年、相良實長○正平十四年十月五日、所謂國合の玄孫爲續、兵を率ゐて來りて

眞幸院を侵さんとする。鳥津國久○加世領主、同季久○帖佐領主等行いて眞幸院を援はんと請ふ。忠昌の

補佐村田經安、平田兼宗等之を斥く。是に於て、國久等憚ばず、翌八年九月、却つて鋒を逆

にし、爲續と兵を連ねて大口長嶺城を圍む。時に肝付兼恒、莊内山田城に在り。宮丸某末吉

を守る。乃ち、北原貴兼と力を協せて長嶺城を援ひしも、戦ひ利あらず。十一日城遂に陥

る。爲續勝に乗じ、進んで牛屎院○うしくそあんを陥れ、相良頼福を以て地頭となす。然るに、翌九年四

月十六日、國久、季久皆降り、國內始めて平かなるを得たり。是に於てか、忠昌終に進みて

日向を侵し、茲に再び伊東氏と難を構ふることとなる。

此の時に當り、伊東氏は國力次第に伸張し、曩に寛正二年三月二十五日、祐堯將軍義政よ

り、日薩隅三州中、鳥津、澁谷二族を除きて悉くその家人たるべきの教書を受けたりとさへ

伊東氏三州



稱せらる。今や、祐堯の子祐國封を繼ぎて佐土原さとばらに居る。島津忠昌先づ人を遣はして、祐國の巨木脇きわき右馬頭、日高周防介ひたかを誘致し、之を嚮導となして來り、飲肥より進みて紫波洲崎城すまきを抜く。祐國之を聞き、自ら兵を督して宮崎に出で、加江田城を攻む。城兵城を燒きて退く。祐國追尾して折生迫せりよぎの嶺を越え、大内海の民屋に火を縱つ。島津軍小内海こうちうみをも保つ能はず。遂に飲肥に遁れ入る。是よりして、伊東、島津二氏再び相挑むに至りしが、會、島津氏に内訌再燃するに及び、祐國機乗すべしとなし、大に兵を山東に用ふ。

伊作久逸の亂

曩に島津氏邊疆の守備として、新納忠續は飲肥に、伊作久逸は櫛間ひまきに鎮せしが、兩人事を以て和せず。動もすれば干戈相見えんとす。文明十六年十月三日、忠續、忠昌に懇へて曰く、臣は先公の命により、飲肥に在りて山東の守備に任ず。然るに、久逸、私怨を以て臣を謀らんとす。願はくば之を他郷に移せよ。然らざれば、臣遂に此の地を成る能はずと。是に於て、忠昌、久逸をその本領伊作に歸らしめんとす。久逸敢て命を奉せず。櫛間城を修めて密に叛を謀る。忠昌再び平田兼宗、村田經安を遣はして之を諭さしむ。尙應せず。乃ち更に久逸の弟福昌寺桂山和尚或は天祐に作るを以て之を説かしむるも、竟に従はず。尋いで、二十六日、叛跡愈、明白となる。忠昌大に怒り、北郷敏久、樺山長久、平田兼宗、村田經安、禰寢忠清、肝付兼連等以下三千餘人を遣はして飲肥を救はしむ。二十八日、敏久等櫛間に進み、熊田原、郡

飲肥櫛間の反目

元に分營す。是より先、久逸は、密に伊東祐國、北原立兼はらたかねと結ぶ。立兼禰答院重度たよのなんと共に兵を擧げて先づ久逸に應じ、尋いで入來院重豐、東郷重理、吉田泰清、菱刈氏重等、亦、皆響應し久逸の兵勢大に振ふ。十一月十四日、敏久等櫛間城を攻め、犬馬場に戦ひて克たず。十七日、久逸伏兵を以て熊田原、郡元兩陣の通路を絶ち、大に敏久の軍を破る。會、伊東祐國櫛間を救ふの報あり。敏久の軍、士氣爲めに益、沮喪し、二十日、遂に陣を撤して還る。

伊東祐國飲肥を撃つ

祐國は、剛勇にして大志あり。今や、島津氏骨肉相争ひ、久逸密にその後援を求むるに及び、機熟せりとなし、同十六年十一月二十八日、大舉兩道より飲肥に向ふ。祐國は、都於郡、佐土原、宮崎、會井、加江田、木脇、八代、三納、穗北、富田、財部、高城、鹽見、日知屋、門川、山陰、田代、神門、入下、宇那間、水志谷、銀鏡、小河、雄八重、中、俣等の兵八千を率ゐ、七浦沿岸より進みて鷯戸山に營す。弟祐邑むらは、清武、田野、石塚、穆佐、倉岡、飯田、内山、綾、紙屋、守永、須木等の兵八千を率ゐ、清武より國見嶺を越え、郷原を経て安國寺北郷に在り、後飲肥に徙る。に營す。かくて兩軍合して一となり、東郷を燒き、鳶が嶺を攻め、廣木田に克ち、新納忠時

第一飲肥役

忠臣の子 忠續の伯父以下を獲、遂に新山城を陥れ、西の郷に侵入して熊谷新城に陣し、以て久逸の來りて忠續の背後を衝くを待つ。十二月四日、久逸兵數千を率ゐて來り、南郷城を抜き、伊東勢と合して兵威愈熾なり。是に於て、和泉久氏の酒谷城を保てる外、飲肥本城の羽翼



概ね断たれ、孤城落日の危きに瀕せしが、而も久氏善く成り、莊内、飢肥の通路尙未だ絶つに至らず。島津忠昌は北郷敏久、樺山長久、村田經安、島津忠廉○帖佐領主、同弟幸久、伊集院久元等をして、再び莊内より來りて酒谷城に入らしめ、以て飢肥本城の外援をなす。島津豊久○初、忠豐、平和泉領主、亦兵三百を以て來りて飢肥城を救はんとし、鎌ヶ倉○吉野方村、酒谷村の境界に陣す。是月二十日祐國、久逸兵二千を以て之を襲ひ、豊久を斬り、和泉久氏、島津忠徳を傷け、その他殺傷甚だ多し。二十三日黎明、祐國、久逸鎌ヶ倉を撤し、各凱旋す。之を第一飢肥役となす。

## 第二飢肥役

翌十七年閏三月四日、祐國再び飢肥城を撃たんとし、北原立兼父子と共に兵八千を率ゐ、七浦沿岸より飢肥に向ふ。弟祐邑亦兵八千に將とし、山道を取りて郷原、内田を経て鶯ヶ嶺に至る。同じく八日、共に楠原に陣す。飢肥軍之を邀へ撃ちて利あらず。伊東軍追撃して宮敷に迫り、こゝに陣す。祐堯亦軍に従ひ、清武に次せしが、四月二十八日、城中に歿す。年七十七。喪を秘して發せず。既にして、祐國飢肥城を圍むこと累月、城中糧食盡き、兵士飢饉に迫り、城將に落ちんとす。忠昌之を聞き、赴き救はんと欲すれども、會霖雨數旬に互り、酒谷川以下諸川漲りて涉ること能はず。

五月二十七日、忠昌先づ國久、忠廉を先鋒とし、都城に赴きて兵を募らしめ、六月十二日、醫昭慶を従へ疾を冒して鹿兒島を發す。海路敷根に航し、十三日、日向末吉に着く。國久、

忠廉及び都城主北郷敏久來り會す。敏久先鋒となり、同十八日、樺山長久、村田經安、加治木満久、島津忠徳等以下兵二千を以て都城を發し、白木俣の嶮を逾え、飢肥酒谷の内、山茂權現、尾に陣す。二陣には國久、重久、延久、安久、忠廉等以下兵二千八百餘、同じく十九日行いて敏久と會し、共に營す。忠昌尙は末吉に在り。會、北原立兼の領邑眞幸の兵、栗嶺○西嶺村に在に來りて火を霧島村に縱つ。志和地領主島津忠堯撃つて之を退く。二十日、敏久、國久の諸軍等しく進みて葦田に陣す。祐國の營と相去る僅に六町餘なり。時に祐國軍を分ちて四となし、自ら久逸、新納是久、北原立兼等と共に楠原を以て本營とし、精兵數百を具して之に居る。大龍寺の前營には伊東二郎五郎あり。田間には伊東二郎太郎、長倉修理亮、野村勘解由左衛門尉、佐土原六郎三郎等あり。野頸には伊東二郎あり。總軍凡そ四千人。楠原、野頸兩陣の間に溝渠を鑿ち、又、所々に櫓を設け、軍容嚴然たり。同じく二十一日、薩軍、亦、軍を分ちて三となし、國久、重久以下千五百に將として永吉の麓なる河原に進み、敏久、忠廉等兵三千を率ゐて楠原に向ひ、新納忠明、和泉久氏等兵五百を以て野頸に當る。總軍約六千餘人なり。此の日、兩軍戰を開く。忠廉、國久と謀りて久逸の軍を野頸に誘致し、國久之を撃ちて克たず。敏久等來りて援けて之を破るを得たり。久逸走りて田間の陣に投ず。戰鬪是より激甚となり、敏久、忠廉、兵を併せて楠原の本營を衝くに及び、伊東勢遂に潰敗



し、主將祐國を初めとし、立兼、是久、長倉修理亮以下八百餘人皆こゝに殞る。初め、祐國、軍敗るゝや、退きて楠原の營に入らんとす。士卒之を知らず。薩軍の追躡を見て、周章狼狽して營門を鎖す。祐國門内に入るを得ず。遂に戦死す。年三十八。薩軍勝に乗じ、追撃すること甚だ急に、田間、大龍寺、宮藪の諸戦に斬獲する所頗る多し。伊作久逸、亦、傷つき、子忠真と共に遂に櫛間<sup>くしま</sup>に走るに及び、伊東氏の兵悉く先を争うて山東に遁れ歸る。かくて伊東氏の十三壘<sup>十三壘</sup> ○楠原、野頭、河上、永吉、田間、宮藪、大龍寺、新山、高ヶ嶽等 悉く島津氏の有に歸し、一時振興の氣運を示せる伊東氏の勢力も、茲に一頓挫を來しぬ。之を第二飢肥役となす。

忠昌久逸を降す

第二飢肥役後、島津忠昌は、伊作久逸の不逞を惡み、兵を遣はして之を伐つ。同年六月二十二日、薩軍進みて酒谷に營す。二十五日敏久、國久、忠廉等進みて櫛間に逼り、熊田原に陣す。二十九日、忠昌親ら兵を督して櫛間に迫る。尋いで、國久、使を久逸に遣はして降を勸む。久逸終に抗する能はざるを知り、七月二日、出で降る。忠昌之を聽し、その罪を免じ、舊領伊作に還住せしむ。是に於て久逸の亂始めて平ぐを得たり。四日、忠昌末吉に凱旋し、八日、鹿兒島に歸る、後、忠昌、北郷敏久の勳功を賞し、中之郷<sup>中之郷</sup> ○諸縣郡 三百町を加賜す。此の時に當り、伊東氏に内難生ず。是より先、文明十八年春、祐國の弟祐邑大友氏に結ばんとし、日知屋<sup>ひぢぢ</sup>に赴き、使者を豊後に送る。蓋し、島津氏に備ふる所あらんとせしなり。然れ

野村の亂

ども、時人頗る祐邑の異圖あらんことを疑ふ。時に、國老野村右衛門、祐邑の叔舅たり。權勢を恃みて驕慢なり。遂に祐國の嫡子尹祐<sup>たすけ</sup> 年十九を廢し、祐邑を以て之に代へんことを圖る。是に於て、四月九日、尹祐刺客を送りて祐邑を日知屋に殺し、尋いで野村父子並にその一族の封内十一城に主たるものを、悉く自裁せしむ。世に之を野村の亂といふ。

加護八幡

其の後、祐邑の靈奇異を爲す。故に享祿四年、都於郡一乘院に之を祀りて八幡大菩薩と稱す。崇禎尙息まず。乃ち、天文五年、國富莊本郷<sup>くにとみ</sup>に移し、郡司分<sup>ぐんじぶん</sup>四十二町の地を附して社領とし、且つ、朝廷に請ひて加護八幡の號を賜ひ、篤く其の靈を慰めきと云ふ。

上卿 中納言

享祿四年十二月十三日 宣旨

勸請

八幡大菩薩

右中辨藤原朝臣保繼 奉

かくて、島津、伊東二氏の争鬭、一旦休むことを得たりしが、伊東氏尙頼りに進撃の機を窺ふ。忠昌、乃ち、その忿怨を解かんとし、文明十八年十月、新納忠續を志布志に復し、末吉、財部、救仁院を領せしめ、同月十九日、島津忠廉を以て飢肥、櫛間の領主たらしむ。十二



伊肥戦役と  
島津氏

月、忠廉帖佐より徙りて之に居る。尋いで延徳二年八月、忠廉歿するに及び子忠朝繼ぐ。上述伊肥戦役は、もとより島津氏外藩の確執によりて誘致せられたる一小波瀾に過ぎずと雖、その島津氏社稷の安危に關るところ至大なるものありき。由來、島津氏の爲に常に壓迫を蒙りつゝありし伊東氏は、此の頃漸く強盛の運を致し、頻りに島津氏の邊疆を窺ふ。會、伊作久逸、新納忠續島津氏の藩屏として山東に鎮し、互に勢威を張らんとして終に相排擠す。是れ伊東氏のために最も乗すべきの好機たり。祐國、乃ち、久逸に款を送りて密に之が後援を約し、遂に久逸をして事を舉げしむるに至る。加之、古來島津氏に平かならざる舊族、祁答院、入來院、東郷、吉田、菱刈の諸氏は、亦皆その積憤を散ずるの機到れりとなし、日向眞幸院の北原氏と相牒し、遙に久逸に應ずるあり。島津氏は、内憂外患一時に臻り、形勢容易ならざるものあり。是に於て、文明十六年十一月、島津友久、同國久等鹿兒島に行き、城廓を築き、晝夜その功を急ぎ、以て萬一の變に備ふる所ありき。

島津忠廉の  
態度

然るに、此の時、島津氏のために、更に一の憂ひをなせるものは、實に帖佐に於ける島津忠廉の嚮背なりき。初め、久逸の叛するや、北原立兼、菱刈氏重と帖佐に行き、忠廉に勸めて與に事を舉げしめんとす。忠廉應ぜず。立兼等懼ばず。乃ち久逸を援けて、以て忠續を撃たんことを圖る。忠廉これ聞き、その舊好ある新納氏の爲めに不利なるを憂ひ、乃

ち詐はりて立兼等に應ずることを諾す。翌十七年正月、入來院重聰、祁答院重度等、亦、帖佐に赴き事を與にせんことを勸む。忠廉從はず、新納氏の難を拯ふべく、躬ら櫛間<sup>くしま</sup>に往きて久逸を説き、忠續と相和せしめんとし、帖佐を出で、都城を経て、二十二日、末吉に至る。遂に忠續の弟忠明の遮るところとなり、行くことを得ず、都城に還る。會、鹿兒島に流言あり、忠廉叛すと。忠廉自ら明かにせん<sup>せんと</sup>と欲するも得ず。遂に兵を舉げて叛す。かくて同二月十一日、忠廉川田城を攻め、郡山郷上之原に忠昌の遣將村田經安と會戦して大に捷ち、二十日、更に吉田、入來院等の兵を率ゐて祁答院<sup>みむら</sup>を攻め、蘭牟田城<sup>らんむた</sup>を抜き、晦日、帖佐に還る。尋いで、三月五日、忠廉大隅上井城を攻めて之を抜き、閏三月朔日、更に菱刈に行きて菱刈氏重と會盟し、相良長輔、牛屎氏等<sup>うしくそ</sup>と相通じ、兵勢大に張る。是に於て、島津國久<sup>○用久の子</sup>之を憂ひ、忠廉を招諭せんとし、之を肥後水俣の相良爲續に諮る。爲續之を諾し、親ら菱刈に至り、忠廉を諭す。忠廉その言を納れ、國久と會見し、爲續等と共に鹿兒島に至り、五月三日忠昌に謁す。忠昌大に之を喜ぶ。時に加治木忠敏、入來院重豊、東郷重理、吉田孝清<sup>○泰清の子</sup>、菱刈忠氏<sup>○氏重の子</sup>等、亦、共に忠昌に歸服す。是より忠廉は、一意忠昌の爲に馳驅奔走し、第二伊肥役に於ては拔群の勳功を樹て、亂平ぐや、特に命せられて櫛間、伊肥の領主となれること既述の如し。



彼の第二飢肥役の起るや、忠昌疾あり。醫を京師に求めて、竹田法印昭慶を得たり。忠昌疾を冒して、自ら兵に將とし、將に飢肥を救はんとす。昭慶萬一を憂ひて之を止め、言若し納れられずんば、請ふ此より辭し去らんといふ。忠昌その誠意を謝し、答へて曰く、伊東氏は吾が累世の寇讐たり。今や吾が叛臣に因りて以て我が邊疆を窺ふ。その寇深くして、吾が忿々の情、亦、忍び難し。乃ち、必ず自ら將として之を撃たんと欲すと。遂に請ひて昭慶を軍に従へ、病軀を勵まして飢肥に進發せり。この一事、以て島津、伊東二氏の歴史的關係と、忠昌が此の戦役に對する覺悟とを窺ふを得べし。

## 第七編 戰國時代史

### 第一章 伊東氏の山西攻略

#### 第一節 尹祐の三侯領有と都城役

伊東尹祐封を繼ぎてより、飢肥に於ける父祐國の横死を深く憾み、島津氏に對する報復の念一日も休む時なし。乃ち先づ山口城に海老原隱岐守、長倉某を置きて之が備へをなし、日夜鏖を磨きて島津氏の邊疆を窺ふ。此の時、豊後の大友氏は、島津、伊東二氏の和親を計らんとし、先づ一族藤北入道を日向に遣はし、尋いで明應四年三月、本城新左衛門及び松尾寺僧仙建等を遣はし、速に島津氏と和すべきを説かしむ。尹祐聽かず。大友氏乃ち更に島津氏に説き、遂に同年十一月廿五日、忠昌をして莊内三侯の地一千町を以て尹祐に割讓せしむることゝなす。是に於て尹祐の念怨稍、解け、二氏の和始めて成れり。かくて伊東氏は

大友氏の仲  
裁



未だ飢肥を獲るに至らずと雖、大に地を山西に開き、直に島津氏の境域に逼るの形勢となれり。

尹祐の驕滿

是より先、尹祐は、阿蘇惟乗の女を娶りて四女を生む。長女は新納忠勝○志布志に、次女は島津忠治○忠昌嫡男に、三女は相良長祇○求摩に、四女は北原貴兼○眞幸に嫁せしめ、聲望愈々加はり、國勢益々張る。會、文龜三年、大旱し、五月下旬より八月に至り雨なく、剩へ九月、大霜あり。年穀登らず、餓孚途に横はる。尋いで、翌永正元年三月廿一日、都於郡火を失し、舊記家乗多く烏有に歸す。加之、當時尹祐意滿ち心驕り、淫逸にして國政を廢し、遂に一の内難を醸すに至りぬ。

尹祐の室阿蘇氏男子なく、尹祐之を遺憾とす。會、嬖妾中村氏男を生む。尹祐大に喜び、立て、嗣となさんとす。國老長倉若狹守、垂水但馬守之を諫むれども聽かず。遂に立て、嗣となす。然るに尹祐寵臣福永伊豆守祐昂○あきの女の垂水又六に嫁せるもの、容色あるを喜び、祐昂と謀りて遂に奪ひて之を幸す。既にして祐昂の女男子○虎乘丸後祐充を生む。尹祐又之を立てんとす。長倉、垂水の二人再び之を諫む。尹祐ただ憚ばず。時に稻津重頼あり。長倉の領邑綾村を得んとし、長倉を讒構す。長倉、垂水自ら明にする能はず。同三年九月朔日、二人遂に意を決して綾城○北股村、錦原の東部に叛す。尹祐乃ち直に兵を宮原に進む。北原氏亦姻戚の故を以て

綾の亂

兵を送り、上畑の砦を抜きて尹祐の兵と共に綾城を攻む。長倉、垂水遂に力屈し、同年十月十七日、並に自盡して事夷ぐ。之を綾の亂といふ。稻津重頼乃ち綾を領するを得しが、後事によりて自刃を命ぜられ、又彼の中村氏所生の男子も、その後永正十四年十一月、尹祐の害する所となれり。

かくの如く、伊東氏領内、内難に苦む時、島津氏に於ては永正五年二月十五日、忠昌病みて歿す。是より先、永正三年、肝付兼久高山城を以て叛す。同八月、忠昌自ら將として之を伐つ。新納忠武○忠續甥志布志の兵を具して肝付氏を援く。忠昌戦ひて利あらず。十月十二日、空しく師を班せり。當時、島津氏國勢振はず、強臣跋扈す。忠昌銳意、難を靖めんと欲すれども得ず。その高山に志を失ふや、之を以て新納氏の然らしむる所となし、居常悒々として樂まず。憤懣の餘、終に疾を發し歿せるなり。忠昌、大友政親の女を娶り三男あり。忠治、忠隆、義忠といふ。忠治繼ぐ。永正十二年八月廿五日、忠治歿す。嗣なし。弟忠隆繼ぐ。同十六年四月四日、忠隆歿し、亦嗣なし。是に於て季弟義忠○義忠即勝久繼ぐ。

かくの如く伊東、島津二氏、共に不振の状態に際し、都城に鎮せる北郷氏は、獨りその勢力を培養し。遂に永正十七年に至り、忠相難を伊東氏の領邑三俣に構へ、志和池、勝岡の諸城を陥れ、益々侵寇の勢を示す。尹祐乃ち同年七月朔日、荒武三省をして勝岡を攻めしむ。三



省攻めて之を復し、更に進みて和田、梶山に營す。同六日、先鋒都城を攻めて城々尾を抜き、忠相の部將北郷民部少輔父子を斬る。是に於て忠相、山田、安永、野々美谷の守兵を駈りて本の原に陣して之に備ふ。

野々美谷城は、初め樺山音久之を領し、傳へて長久に至りしが、是歲、島津義忠、堅利○大隅、小窪○同、小窪○大隅、河北○清水郷、白崎、持松○囃を以て野々美谷に代へ、之を北郷忠相に與ふ。忠相乃ちその族北郷尙久を以て之を守らしむ。

都城進撃

大永元年三月、三省志和池城を攻めて功あり。尋いで翌二年四月四日、尹祐一族祐梁、祐兵○或は祐武に作る、僧一海○黒貫寺住、國老落合兼代、福永祐景、稻津重昌等以下兵凡一萬を以て都城を進み撃つ。忠相亦兵を出して邀へ戦ひ、勝敗未だ決せず。此日、伊東勢梶山に陣す。時に、山田城主北郷久家都城を來り援ひ、且つ忠相を諫めて曰く、今敵の爲に攻められて山田を奪はれんより、寧ろ先じて之を北原氏に返し與へ、伊東氏には野々美谷を與へて以て和平を計るに如かずと。忠相聽かず。久家乃ち死を決し、梶山城を襲ひて小鷹原に戦死し、忠相その兵約八百餘を失へり。然れども伊東勢亦敢て之を窮追せず。和田、梶山の守備を嚴にし、以て持久之策をなす。北原氏は、伊東氏の爲に、舊領山田城を復するを得、小松頼武をして之を守らしめしが、後、北原遠江守を以て之に代へぬ。

尹祐の暴死

かくて翌三年十一月八日、伊東、北原二氏、共に兵を連ねて野々美谷城を攻むるに及び、城主尙久力戦して死し、城遂に陥る。然れども是日、尹祐暴かに陣中に歿し、十二月十日、弟祐梁亦卒に歿す。流言あり、忠相刺客を送りて二人を殺すなりと。是に於て、野々美谷城は陥りしと雖も、今や伊東勢はその主將を失ひ、終に空しく軍を班すの餘儀なきに至り、北郷氏纔に難を免るゝを得たり。

### 第二節 祐充と梅北、高城の役

大永三年、尹祐の子祐充○虎繼、年甫めて十四、外祖父福永祐景及び稻津修理亮○重が輔佐たり。祐充幼弱と雖、深く父尹祐の横死を傷み、必ず讐を北郷氏に報いんとす。忠相之を憂ひ、その憤怨を解かんとし、同四年五月五日、遂に野々美谷城を祐充に譲りて和を約す。曩に明應四年、尹祐三俣一千町を島津氏に得て和平を成せしと雖も、北郷氏頻りに兵を三俣に動かし、梶山、勝岡、野々美谷等伊東氏失ふ所多かりしが、今漸く之を復するを得、邊疆始めて泰かなり。

當時、島津氏内難紛出し、氣勢甚だ昂らず、寧ろその外藩の強大を憂ふるの状態に在り。



北郷氏の重

即ち彼の志布志の新納氏の如き、明應六年忠昌の高山を攻むるに當り、肝付氏を援けて忠昌の軍を撃ち、尋いで永正十七年八月、義忠の伊集院尾張守の大隅贈喉郡に叛せるを攻むるに當り、復兵を出して之を援へり。かくの如く、新納氏の島津氏に禍する一再ならざるを以て、義忠深く之を惡み、大永三年十二月、伊地知重周等をして新納氏の邑救仁院槻野○或は月野に作るを攻めしむ。新納忠勝邀へ撃つて之を破り、重周以下を獲、益、暴威を振ふ。次に都城に鎮せる北郷氏の如き、亦新納氏に比して遜色を見ず。その祖資忠北郷三百町を領せしより、世、一郷一院を領せしが、今や忠相繼ぐに及び、驍勇にして能く兵を用ひ、始めて都城、安永二城を領し、此の後又大に地を拓くに至る。當時伊東氏河南、河北の地及び山之口、高城○三侯院、梶山、勝岡、野々美谷を領し守兵一萬六千人。北原氏は飯野、加久藤、三山林○小、志和池、高原、山田、馬關田、栗野、横川を併せて守兵一萬餘人。新納氏は志布志、安樂、夏井、櫛間、大崎、松山、恆吉、梅北、岩川、末吉を領して守兵八千餘人。本田氏は清水○噺喉郡を領し、諸氏動もすれば北郷氏の領域を侵さんとす。忠相、飢肥の島津氏と堅く締盟し、能く是等の勁敵に當り、父祖以來の盛名を隕さず、又連りに兵を出して伊東氏の領邑を侵せしが、今や悟る所あり、野々美谷を伊東氏に委して和し、且つその女を祐充に與ふるを約し、同四年八月廿九日入與せしむ。二氏の盟約、是に於て列めて堅し。尋いで同六年、大隅贈喉郡の亂

徒、本田親尙に背くや、忠相乃ち五月廿日、兵を遣りて贈喉郡城を撃たしめて之を奪ひ、一族北郷久利をして之を領せしむ。

祐充既に三侯八外城を復し、新に北郷氏と通婚して兵勢愈々張る。會、大永六年七月肥後國求摩の人犬童刑部左衛門なるもの、その主相良長祇に叛す。長祇は祐充の姉夫たるを以て、祐充乃ち荒武三省弓削木工允等を遣はして求摩に赴かしむ。八月七日、三省等宮之原城を攻めて犬童を獲、騷亂忽ち治まる。翌七年十二月廿六日長祇都於郡に來り、祐充に謝するに求摩鎮定の勞を以てす。

是歲、十一月廿七日、島津氏に於ては、義忠老して家督を養子貴久○相模守忠良の子に譲り、翌七年四月、伊作城に移り、貴久は鹿兒島に居る。尋いで翌享祿元年三月廿日、貴久、祐充と和を修し、領土の境界を劃定す。然るに彼の新納忠勝は、曩に本宗島津氏に叛して勢ひ猖獗を極めしが、今や又伊東氏と釁を開くに至り、祐充兵を進めて小鷹原に陣し、忠勝冷水○内中ノ郷に屯して相對峙す。五月朔日、伊東勢進みて忠勝の軍を撃つ。忠勝之を禦いでその先鋒を破る。會、北郷忠相、兵八百を率ひて又城々尾に陣す。伊東、新納二氏各、援を忠相に求む。忠相陰に新納氏を援けんとす。家臣大久保刑部左衛門諫めて曰く、新納氏同門の誼を忘れ、動もすれば則ち我が財部院を侵す。今若し伊東に克たば、勢に乗じて必ず來りて我を撃た

犬童の亂



ん。如かず伊東氏と連和して之を撃ち、その銳を挫かんにはと。忠相之に従ひ、兵を勦して忠勝の軍を衝く。伊東軍之が爲めに大に奮ひ、城ヶ尾、横尾、黒坂に轉戦して忠勝を走らし、北郷氏の兵と共に追尾して、梅北城を脅かして還る。この役、忠勝その族忠祐、仲久以下兵を失ふこと七百餘、忠相亦その族久剛、忠次以下失ふ所少からず。六月廿日、島津義忠、忠相の軍功を賞し、命じて大隅國財部院を領せしむ。蓋し、新納氏曩に義忠に叛し、義忠之を甘心する能はず、心私かに遺憾とす。今や忠相の新納氏を破るを見て快心に堪へず、之を賞賜せるなり。

梅北城役

若き衆の亂

然るに、享祿四年、伊東氏に於ては、再び内訌の紛出を見るに至る。當時、福永祐景は祐充、祐清○後ち、義祐、祐吉等の外祖父として、獨り威福を恣にし、事を行ひて自專なり。是に於て、都於郡城下の士、少壯の輩相結びて祐景を除かんとし、國老稻津重昌を推して頭首となし、祐充の重臣落合兼由亦之に加はる。重昌に黨するものを若き衆方と稱し、祐景に與するものを守護方と稱し、是より兩黨相軋轢す。享祿四年六月下旬、若き衆方城下東興庵を夜襲し、勢ひに乗じて城に入り、祐景を獲て甘心せんとす。祐景之を聞き、七月四日、壯士を途に伏せ、兼由の參朝を要して之を害す。尋いで七日、兩黨大に城下犬馬場に闘ひ、重昌等敗れて自盡し、餘衆亦皆離散す。是より祐景の横暴益加はり、上下等しく之に苦む。世に之

を若き衆の亂と稱す。

伊東氏既に三俣八外城を復し、稻津民部少輔、落合加賀守を梶山に、加江田殿を勝岡に、米良尾張守を野々美谷に、福永丹波守及び其子惟實を下の城に、宮崎某、宮永六郎を小山に、長倉某、海老原隱岐守を山之口に、村山某、川崎甲斐守を松尾城に、八代祐景を高城に各、地頭たらしむ。八城の守兵合せて一萬三千人、旗幟相望み、鐘鼓相應へ、兵威四邊を壓す。然るに北郷忠相、島津忠朝○飯肥は、固より島津氏東邊の重鎮として自ら任ずるもの、今伊東氏の盛況を見て晏如たる能はず。竊に三俣恢復を企て、天文元年、眞幸院なる北原氏と締盟し、先づ三俣院高城を奪ふべく、十一月廿五日、三家の兵を舉りて三俣院に屯す。島津氏の兵凡そ六千人、日置伊勢守、柳瀬、羽島等之を率ゐて高城に向ひ、北郷氏の兵數凡そ四千人、山内某、小杉頼武、和田起雲、兒玉、土持、河野等之を率ゐて梶山に向ひ、北原氏の兵凡そ八千餘人、白石、田平、長野、澁谷等之を率ゐて野々美谷に向ふ。かくて廿七日三軍等しく高城々下に迫る。伊東方八城の諸將亦其の守兵を擧げて高城を來り援け、此日兩軍大に不動寺馬場に會戦す。伊東軍終に利を失ひ、石山越に退き、防戦最も昂め、纔に全敗を免る。三俣千町、殆ど之を失はんとして、辛うじて保つを得たり。然れども、この役、海老原、稻津、八代以下八城の諸將殆ど皆斃れ、士卒の死するもの七百三十餘人なり。尋いで翌二年三

高城役



月廿八日、伊東軍島津忠朝の兵と三侯に戦ひて復大敗し、伊東氏の三侯領有も次第に困難を訴ふるに至れり。

### 第三節 左兵衛佐の亂と三侯喪失

伊東氏は、外は連りに三侯に敗れ、國步艱難を極むるの秋、内は繼嗣に關する紛争續出して、國力益々疲弊し、遂に三侯をも奪還せらるゝに至れり。天文二年八月廿八日、祐充都於郡田中の館に歿す。年廿四。子なし。祐充の叔父祐武事を専らにす。九月二日、祐武彼の福永祐景父子四人に死を賜ひ、且つ曩に若き衆の亂に當り、その徒の土佐、豊後、及び肥後求摩、眞幸地方に離散せるものを召還し、頻りに恩を雋り、巧に人心を攪る。士庶乃ち密に之を推戴するの意あり。是に於て、祐充の二弟祐清後ち義祐、祐吉、祐武を避けて上洛せんとし、同十一月廿二日夜、竊に日知屋に至り、遂に船に投ず。

弓削式部少輔夙に國事を憂ひ、自ら財部に赴き、城主落合民部少輔と謀り、祐清等を財部に迎へんとす。乃ち中村伊豫なるものを日知屋に遣はし、書を祐清に致さしむ。祐清等既に海上に在り。伊豫酒で船に至り、其書を呈す。祐清之を諾し、再び日知屋に還りて茲に

祐武と義祐

留まる。かくて檄を山陰○白杵郡に傳ふるに及び、米良宮内少輔並に北浦の諸族來り屬し、門川、鹽見、日知屋の三城以北悉く祐清に屬す。荒武三省之が輔佐の任に當り、十一月十六日、兵を具して都於郡に至り、祐武に迫りて遂に自刃せしむ。

亂 左兵衛佐の

然るに、祐武の遺子左兵衛佐、再舉を計らんとして、同十七日、米良山中に走り、平野に至る。米良石見守山裏に在りて之に應じ、檄を四方に傳ふ。雄をばえ八重、仲侯、銀鏡、小崎、神門、石尾、小河、三納、内山、木脇、穆佐、本庄、綾、八代、穗北等の士、平野に會するもの三千餘人、直に軍を野別府の原に出し、都於郡に迫らんとす。廿二日、祐清出で、難を日知屋に避く。左兵衛佐乃ち都於郡に入る。十二月中旬、祐清、伊東相模守、荒武三省等と山陰、坪谷、田代、水志谷、鹽見、日知屋の兵三千を率ひ、美々河を渡りて野別府に陣す。財部城主落合民部少輔亦祐清に應じ、兵勢甚だ振ふ。左兵衛佐之を高城々下に邀へ撃つて大敗し、遂に内山に走る。尋いで穗北、三納、平野、八代、綾、本庄、木脇、穆佐以下祐清に應じ、高城亦降る。十二月十三日、祐清都於郡を復す。世に之を左兵衛佐の亂といふ。

當時、眞幸院に據りて虎視耽々たる北原貴兼は、今伊東氏の内訌に乗じ、獲る所あらんとし、是月十五日、援軍と稱して兵三千を率ひて綾村に屯し、綾城、高城○三侯院の中其の一を得んことを求む。祐清乃ち已むことを得ず、高城を以て貴兼に割くべきを約す。然るに高城



三俣八外城  
守を失す

々主落合<sup>○刑部</sup>兼佳は、陰に北郷忠相に應ずるの心あり。祐清の命を奉せず。天文三年正月六日遂に叛し、夜に乗じて忠相の兵を城に入る。是に於て、翌日、梶山、勝岡、山之口等の守兵皆城を棄て、逃れ去り、十六日に至り、八外城の守備終に悉く空し。忠相乃ち高城に移り住み、子忠親をして都城を留守せしむ。尋いで兼佳の子を質たらしめ、三俣の内若干の地を兼佳に給して之に居らしむ。

此時、彼の左兵衛佐は、猶ほ内山城に在りて再舉を企て、木脇城主野村某之に應じ、勢ひ稍振ふ。二月五日、祐清大舉して之を襲ふに及び、城守りを失し、海老原某左兵衛佐に代りて死し、左兵衛佐は纔に身を以て薩摩に遁る。是より先、二日、左兵衛佐の餘黨なる米良の亂徒高城<sup>○新</sup>を襲ひて之を奪ふ。廿八日、祐清兵を出して之を攻め、その三百廿餘人を斬獲す。然れども此役、祐清亦その宿將荒武三省を失へり。

かくて伊東氏繼嗣に關する騷亂は、漸く鎮定を見るに至りしが、明應四年、島津氏をして割かしめし三俣八外城、之を領有すること僅に四十年、再び島津氏に復せられ、山西に於けるその勢力に、一大頓挫を來したり。

#### 第四節 島津氏の内訌と伊東、北原二氏の

##### 干涉

島津氏東邊  
の三鎮

島津氏の外藩として日向方面に配置せるものには、都城の北郷氏、餓肥の島津氏、及び志布志の新納氏あり。三氏各、鼎立の勢ひをなし、互に強盛を競ひしが、獨り新納氏は、伊東氏の侵寇を蒙ること北郷、島津二氏に比して少く、爲めに驕滿の心を生じ、動もすれば本宗島津氏の命を奉せず。之に反して北郷、島津の二氏は、常に盟約を堅うして伊東氏に備へ、又、竊に新納氏を圖るあらんとす。然るに當時、本宗島津氏は、勢力微弱にしてこの三雄藩を掣するの力なく、終に往年伊作新納二氏の間に見たる如き反目を三氏の間に見、伊東、北原の二氏亦之に關與して各、その利を計らんとするに至る。

天文四年八月、内訌遂に爆發し、十四日、島津忠朝<sup>○餓</sup>北郷忠相と盟約して、先づ兵を發して新納氏の領邑末吉、松山、梅北を攻む。伊東祐吉<sup>○祐清の弟、當時都於郡の主</sup>北原貴兼と兵を出して新納氏を援ひ、火を都城附近に縦つて北郷氏を脅かす。忠相乃ち戦はずして兵を還して之に備ふ。

十一月廿九日、忠相兵を出して北原氏の領邑志和池を掠め、百餘人を斬獲す。尋いで五年二月廿五日、貴兼山田城の兵を以て安永を來り侵す。忠相擊つて之を破る。池袋源左衛門



之に死す。

是より先、島津忠朝は、その族忠吉をして申良城を守らしむ。肝付兼興來りて之を攻む。忠朝使を遣はして新納忠勝に援を乞ふ。忠勝之を諾して而も來り助けず。城遂に陥り、忠吉戰死す。是に於て、忠朝、忠勝の背信を惡み、是歲八月十一日、志布志を撃ち、閏十月十八日、再び來りて志布志を侵し、市井を破り、横峯に克ちて還る。尋いで六年三月三日、忠相又新納氏の領邑末吉郷岩川新城○中ノ内村に在りを陥れ、城兵二千餘人を降し、七月、忠相更に蒲生武範を大隅國下財部横市より召し、新納氏の有する財部城を陥れんことを計り、翌七年正月三日、攻めて遂に之を復することを得たり。

かくの如く、島津氏外藩の争衡絶えざるに當り、鹿兒島に於ては、島津實久の亂あり。實久亦新納氏と鋒を交ふるに及び、禍亂は愈々激甚を極むるに至れり。

是より先、島津義忠○後勝久非道にして舊勳を黜け、末弘、小倉等の新參を寵し、相與に飲博し、政務弛怠、上下怨謗す。是に於て川上昌久、重臣十六人と共に島津實久○久豊の次男用久の裔、姉は義忠の室加世田城主に頼りて諫奏す。義忠用ひず。昌久等乃ち末弘を谷山皇徳寺に殺す。義忠大に怒り、天文四年四月、昌久を川上より召して之に死を賜ふ。實久深く之を怨み、昌久の黨と共に遂に叛し、河邊の兵を以て鹿兒島を侵さんとす。義忠援を北原、肝付、祁答院の三氏に求む。

島津實久の亂

三氏各、兵を出して鹿兒島を救ふ。鹿兒島の兵陰に實久に應ずるものあり。肝付、祁答院等の軍敗れ、實久鹿兒島に入る。義忠帖佐に奔り、祁答院氏に倚り、後真幸に走りて北原氏に頼れり。

義忠其の後都城北郷氏の許に寓居する事八九年、尋いで生母の緣故を以て豊後に赴き、沖濱に居り、天正元年十月、此處に歿す。

是に於て、實久入りて鹿兒島に居り、國政を執り、遂に自ら薩隅に守護たらんとす。六年實久、都城に赴き、由を忠相に告ぐ。忠相之を諾す。飢肥に行く。忠朝亦之を諾す。實久乃ち忠相、忠朝、本田薰親○大隅清水領主等と共に志布志に肝付、禰寢氏等と會し、又由を新納忠茂に告ぐ。忠茂父忠勝と謀りて之を否む。是に於て實久、忠相、忠朝等と結び、新納氏を滅せんことを計り、清水に赴きて兵を募る。生別府城主樺山幸久先づ之に應ず。かく島津氏領内人心の動搖甚しく、内難愈々紛出して底止する所を知らず。新納、北原二氏は、義忠を助け、北郷、島津○飯肥二氏は實久に與みして新納氏を圖らんとす。即ち七年正月、忠相の財部院を復せるを初めとし、同月廿九日、忠朝は一族忠隅をして大崎城を攻め降さしめ、二月二日、忠相梅北城を抜き、忠朝同廿日安樂城を、四月夏井城を、七月廿三日末吉、山二城を陥る。かくて忠相、忠朝等は既に新納氏の諸城を取り、肝付兼演、樺山幸久等と共に遂に志布志城下に



迫る。新納忠茂急を島津貴久○義忠の養嗣子、相模守忠良の子に告ぐ。貴久、國事方に多端にして、赴き救ふ能はず。使を忠茂に遣はして忠朝等と相和せしむ。是に於て、忠茂もはや奈何ともする能はず。遂に城を以て忠朝等に授け、其母と共に日向佐土原に來りて伊東義祐○初め祐清に頼る。忠茂の母は義祐の長姉なり。

新納氏伊東氏に頼る

新納忠茂歿落の後、忠朝は忠茂の父忠勝に、特に許すに櫛間の内市來五十町の地を以てし、自ら救仁院、末吉、松山を領し、忠相は財部、梅北を領す。後、忠朝三俣院高城を以て梅北に易へんことを求む。忠相之を許す。尋いで十一月十九日、忠朝の子忠廣志布志に移る。忠相亦都城を長子忠親に譲り、自ら三俣院高城に居る。

既にして、伊東義祐は、新納忠茂の投歸によりて、再び難を北郷氏に構へ、天文十年高城の恢復を期して兵を鳥越○三俣院に次す。是より先、北原貴兼の臣堅山丹波、北郷忠相の臣有田加賀と相會して二家の和を約せしが、幾干もなく和再び破れ、是歲四月、忠相志和池を攻め、火を繩瀬に放ち、五月、更に山田城を攻む。是に於て北原氏、亦兵を志和池城に籠めて義祐の後援をなし、六月廿六日、二氏の兵大舉して高城を攻む。忠相之を諷訪、馬場に防ぎ、勝岡、梶山、山之口諸城兵亦來りて伊東、北原の背を衝き、夾撃して之を退く。此の役兩軍死傷相當れり。

其の後島津氏の内訌全く息み、貴久銳意治を圖るに及び、國勢復振ひ、伊東、北原二氏竟に何等獲る所なくして止みぬ。



## 第二章 伊東氏の飢肥占領及肝付、北郷、北原三氏の消長

### 第一節 長倉の亂及第三飢肥役

義祐と祐吉

曩に落合兼佳の叛するや、長嶺地頭長倉能登守異圖を懷き、祐清○即ち義祐の弟祐吉の黒貫寺に在るを迎へて還俗せしめ、天文三年正月六日佐土原に、同十二日曾井城に、同十五日清武城に、二月十九日宮崎城に迎へ入る。祐清乃ち祐吉を避け、薙髮して可水と稱し、庵室を富田郷に結びて萬歲軒と號す。

會、同四年十二月、門川城主某、縣の土持氏と結び、本城、鳥越、狗山、佐々宇津の四壘を修めて伊東氏に叛す。十五日、祐吉兵を發して鳥越を抜く。他の三壘亦相繼いで陥り、亂忽ち鎮定す。五年六月八日、祐吉宮崎に卒す。七月十日、祐清還俗して、富田郷より佐土原城に入り、家を繼ぐ。都於郡城は、是より先、二年十二月、兵火に罹れるを以てなり。六年四月、祐清從四位下に叙し、同八月廿三日、將軍義晴の偏諱を賜ひ、名を義祐と改む。

同十二月廿二日、佐土原城火を失す。義祐轉じて宮崎城に移る。翌七年四月、義祐太刀一口○包永青銅十萬疋を義晴に獻じ、曩に偏諱を受けたるを謝す。義晴亦太刀一口○景を義祐に與へてその特志を賞す。當時、八代但馬守、河崎三河守、野村備前守、長倉播磨守等、義祐の執事たり。然るに彼の長倉能登守は、その擁立せる祐吉が、僅か三年にして早世し、義祐再び代り立つを見、心甚だ平かならず、私に同志を糾合して、義祐を除かんとす。かくて天文五年より十年に至り、國內人心動搖して一に歸せず。新納、島津、北原、北郷の諸氏、亦陰に長倉の黨を援けて各、利する所あらんとす。

十年七月、池尻因幡守、阿萬左衛門宮崎城に在りて先づ能登守に應ず。義祐乃ち同月十日、命じて兩人を自盡せしむ。是に於て同十七日、能登守遂に長嶺に據りて叛す。穆佐城主長倉上總介○能登守と同胞と稱す之を援け、石塚、田野亦之に應ず。かくて廿四日、曾井の兵出で、石塚高蟬カウゼンを攻むるに及び、能登守長嶺より進みて之を撃ち、八代彦六左衛門尉以下を獲、兵勢大に振ふ。義祐之を見て大舉來り攻めんとす、能登守乃ち援を北郷忠相に求めて曰く、幸にして來援を得ば、河南の地を以て降らんと。忠相可かず。轉じて島津忠廣に求む。時に忠廣疾患ありて國勢を見ず、日置美作守久範獨り權勢を弄す。今、長倉氏の援兵を求むるを以て、奇貨措く可しとなし、八月廿八日島津藏人頭、羽鳥上總守、新納新右衛門○飢肥南郷地頭等

長倉能登守の叛



と、兵三千を以て飢肥を發し、九月朔日大塚に屯す。二日藏人頭は、加江田、本郷の押へと  
して中村の高尾に備へ、久範は曾井、清武の受手として、太田日柱に備へ、上總守は柳瀬口  
に備ふ。三日能登守等、飢肥の援軍と合して太田日柱口に進み、曾井、清武、本郷、加江田の  
兵と激戦す。能登守の軍終に敗れ、能登守を初めとし、久範、藏人頭、上總守、新納新右衛門  
等の主將皆斃れ、新納忠郷、同忠常以下、將卒凡そ七百餘人悉く戦死す。長倉上總介は鬼山  
を越えて山之口に奔り、後、末吉に逃れ、幾子もなく此處に病歿す。尋いで義祐の兵石塚、  
長嶺をも鎮定し、騷亂全く平ぐ。世に之を長倉の亂といふ。今、宮崎市福島町の後丘に能登越と稱しそ  
の戦死の趾を傳ふ。俗説、平教經に掛く。  
義祐は、祖父祐國の飢肥に於ける横死を傷み、之が報復を期するや久し。然るに今や長倉  
の亂に當り、飢肥兵の來り寇するあり、是に於て義祐が忿恨は彌々重なり、天文十年十月  
十日、一族重臣を會して飢肥進撃を議す。尋いで十七日、義祐宮崎池内城を發し、十八日  
瀬平に進み、城塞を築き、守兵を留めて一旦歸城す。島津忠廣之を聞き、亦軍を鶴戸山鳥  
帽子形嶺に屯して之に備ふ。かくて兩軍對峙して未だ發せず。同十二年三月廿八日、義祐  
愈、その瀬平の軍を進めて鶴戸山鳥帽子形嶺の敵を襲ひ、三十日遂に之を逐ふ。此の役義祐の  
麾下薩摩坊頼運、忠廣の將下田隱岐守と相搏ちて之を殺し、城忽ち陥る。守兵三百の内鶴  
戸岩窟に遁れしもの、島津次郎左衛門尉以下四十餘人を生擒す。此の内阿田源六以下廿餘

第三飢肥役

人は之を飢肥に返し、その他は兒湯郡穗北村花園に留置し、後之を自刃せしむ。

忠廣敗報に接して、甚だ之を憂ひ、大友義鑑に依りて義祐と和せんとし、同年七月、志布  
志大慈寺の僧好意を豊後國府内に遣はす。五日、好意油津を發し、七日、東海港今東に上  
白杵郡に上  
陸し、十四日、府内に入り、翌日、義鑑に面謁し、來意を陳す。議協はず。九月廿九日、  
空しく油津に歸る。翌十三年二月、忠廣再び好意を豊後に遣はし、媾和の事を計らしむ。  
八月、好意歸る。是に於て十月十八日、義鑑の使僧定惠院飢肥に來り、永慶寺に投じ、二  
氏の和を計りて十二月中旬に至る。然れども、義祐、忠廣をして必ず地を割かしめんと欲  
す。忠廣肯せず。乃ち和遂に成らず。

大友氏の仲

第二節 北郷、北原二氏の衡爭

眞幸院主北原氏は、婚を伊東氏に通じてより、遂にその後援を恃み、常に北郷氏とその境  
域を争ふ。天文十年、義祐の軍を鳥越に進むるや、北原氏亦兵を志和池に屯し、共に高城  
攻撃の事に従へり。是に於て、同十一年二月十二日、北郷忠相兵を擧げて志和池を攻め、  
水流、繩津、瀬越に至りて軍を班せしが、閏三月三日、再び志和池を襲ひ、森田、兒玉口、西

北原氏と伊  
東氏の連衡



拵諸村の農作を害して還る。是より先、北原氏は白坂左衛門を以て山田地頭となししが、城中陰に北郷氏に應ずるものあり。忠相遂に之を奪ふ。其の後、北原氏之を復し、北原遠江守をして之を守らしむ。今や忠相の兵再び來りて木野、牛谷等の田畑を掠むるに及び、北原兵出で、之を防ぐ。忠相の兵追うて之を霧島に斥く。尋いで六月十八日、北原氏勝岡を襲ふ。勝岡、梶山の兵、合して平江<sup>○今高木</sup>に邀へ撃ち、大に之を破る。七月四日、忠相、復、志和池を攻め、八月二日北原氏の領木野、牛谷、楠<sup>ひね</sup>牟禮を掠む。眞幸の兵志和池城兵と協力して之を破り、進みて薄谷に追撃す。忠相軍を返して九谷川に戦ひ、終に之を斥く。此の後兩軍互に殺傷あり。同月廿日に至り、北原氏、伊東氏と兵を連ねて高城を攻む。忠相急を都城に子忠親に報じ、日暮、忠相自ら出でて小山河原に奮闘す。既にして忠親來りて寶光山に陣し、忠相と共に夾撃して大いに伊東、北原の軍を破り、志和池城主白坂下總守<sup>○兼次</sup>、栗野地頭澁谷兵庫以下七百餘人を斬獲す。然れども、忠相、忠親の軍、亦失ふ所甚だ多し。此の役北郷久厦最も戦功あり。

尋いで十二月十六日、忠相進んで野々美谷を陥れ、同族北郷久隆を以て地頭となし、細山田了性をして野々美谷石垣城を守らしむ。是に於て伊東氏遂にその鳥越の陣を撤するの已むなきに至れり。

山田城

翌十二年正月廿四日、忠相更に安永、都城の兵を率ゐて再び山田城を奪ひ、北郷忠茂をして之を守らしむ。山田城是より永く北郷氏の有に歸す。尋いで五月九日、忠相、忠親大舉して志和池城を攻む。野々美谷城兵は忠親と共に柳川原口に、安永、山田、財部の兵は幸祥寺口に、高城、山之口の兵は羽田口に、梶山、勝岡の兵は今<sup>いま</sup>梅口<sup>ひぐら</sup>に迫る。忠相先づ新城<sup>○附城</sup>を陥れ、忠親尋いで西圍<sup>○附城</sup>を破る。是に於て志和池本城遂に守る能はず。十日出で、降る。十一日小松右近、蒲生式部、城を受け、忠相、忠親と共に城中に入る。此の役北郷久厦復殊勳あり、廿七日、忠親之を賞するに三俣院太郎坊を以てす。

〔北郷氏系圖〕

今度就<sup>ニ</sup>弓箭<sup>一</sup>、於<sup>ニ</sup>高城合戦<sup>一</sup>被<sup>レ</sup>抽<sup>ニ</sup>粉骨<sup>一</sup>候。兼又志和知之事、連<sup>ニ</sup>以<sup>ニ</sup>武略<sup>一</sup>、輒入<sup>レ</sup>手候。兩度之忠節無<sup>ニ</sup>比類<sup>一</sup>候。仍爲<sup>ニ</sup>忠賞<sup>一</sup>、三俣院太郎房村所<sup>ニ</sup>充行<sup>一</sup>如<sup>レ</sup>件。

天文十二年癸卯五月廿七日

忠 親 (花押)

北郷又五郎殿

かくの如く、此の方面の戦闘に於ては、北郷氏北原氏に對して常に優越の形勢に在り。北原氏は只管伊東氏の來援を望めども、當時、伊東氏は専ら力を餓肥に用ひ、之に應ずる能はず。爲に北郷氏の勢力益加はり、第四餓肥役の起るや、北郷氏亦赴き援け、大に伊東軍



を破りて更に武名を揚ぐるを得たり。

當時、大隅清水城に本田薰親あり。贈噺郡を併せ領して勢ひ稍振へり。抑、贈噺郡は、大永六年以來、北郷忠相の領する所にして、北郷久利をして之を守らしめしが、享祿三年、本田氏祚答院と力を協せて之を陥れしより、本田氏の領する所となれり。然るに、その後天文十七年に至り、薰親島津貴久に叛く。貴久、島津忠良をして、兵を宮内に發して之を攻めしむ。薰親、乃ち、贈噺郡を北郷忠相に與へて仲裁を求め、和漸く成る。既にして薰親復叛し、北原氏守之を援く。是に於て、同八月晦日、伊集院忠朗等北原氏の兵を日當山に攻めて之を陥れ、平良、白坂以下百餘人を獲たり。薰親更に澁谷氏に頼りて爲す所あらんと欲せしも果さず。終に力屈し、九月九日、清水城を棄て、莊内に奔り、忠相に頼りて以て罪を貴久に謝す。忠相の子忠親は、後、既肥島津忠廣の養子となりて封を繼ぎ、父子相呼應して伊東、北原等の勁敵に當り、以て永く島津氏東境の重鎮たりき。

### 第三節 第四 既肥役

天文十四年正月廿六日、伊東義祐、復既肥を撃たんとし、軍を進めて水ノ尾既肥に營す。

二月十二日島津忠廣、忠隅忠廣の從弟、賀久忠隅の子をして中ノ尾並に鬼ヶ城を衛らしむ。廿四日、義祐中ノ尾を陥れ、守兵の少きを察して、徑に既肥本城を襲ひ、其の外郭を焼き、民家を毀ち、犬ノ馬場の城門に薄る。新納忠勝入道市來より來りて忠廣を救ひ、撃つて義祐の軍を破る。廿六日義祐鬼ヶ城を攻む。克たず。轉じて高佐に屯す。後、忠隅鬼ヶ城の兵を撤して既肥に還る。義祐乃ち鬼ヶ城を收め、守兵を駐めて還る。

然るに同六月廿九日、忠隅先敗を雪ぐべく、兵を出して義祐の鶴戸山の砦を焼き、守兵十餘人を捕ふ。八月十二日、義祐の兵出で、古市附近の民屋を焼きて還る。

初め、忠廣既肥の附城として營を郷之原に設け、羽鳥越後守、宇宿小次郎をして之を守らしむ。義祐の將河崎三河守、利を以て羽鳥を誘ふ。當時羽鳥の弟僧宗識、鶴戸山の別當たり。羽鳥宗識を招きて之を諮る。宗識之を諫む。羽鳥その密事の洩れんことを恐れて之を斬り、十二月廿三日、宇宿と共に城を以て義祐に降る。義祐乃ち河崎三河守をして之を守らしむ。尋いで同廿八日、目井城主日高清左衛門亦城を以て義祐に降る。是に於て伊東氏の兵勢愈熾んなり。

既肥院はもと東西南北の四郷に分れ、後、北郷を郷之原と稱し、東郷を單に東と稱し、西郷はその名を失ひ、南郷獨りその舊名を存す。



翌十五年正月廿一日、北郷忠親○忠相の子飢肥を救はんとして、兵を率ゐて酒谷城に入る。然るに同廿三日、忠廣の養子賀久病みて飢肥城に歿し、忠廣嗣を失ふ。是に於て二月十八日、忠廣島津貴久に請ひ、北郷忠親を猶子となし、以て義祐に當らしむ。忠親乃ち飢肥本城○尾城に入りて封を繼ぎ、その子忠豊○後時久をして、都城北郷氏を繼がしむ。賀久の實父忠隅、茲に至りて太だ之を憚ばず、頗る偏執の色あり。貴久乃ち禍亂の發せんことを恐れ、遂に忠隅及び、その一族を流謫せり。是より先、天文五年伊東義祐は禁裡修造に際し、費用百八貫九百四十文を献じ、同六年四月二日、從四位に叙せられしが、是年十二月三日、更に從三位に叙せられ、意足り、心驕り、益、鋒を鋭くして飢肥を攻む。然れども飢肥本城には、今や剛勇父に劣らざる忠親の新に入りて衛るあり。大いに伊東氏の兵を撃たん事を期し、都城主忠豊と力を協せ、更に梅北、志布志、櫛間の兵を促し、翌十六年正月十九日、郷原を襲ひ、その守兵五十餘人を斬り、百餘人を捕へ、島津氏の兵勢再び振ふ。

當時、肝付兼續○省島津貴久に異志あり。義祐乃ち遙に之に應じ、二月廿三日再び飢肥本城に迫る。忠親之を禦ぐべく、四月十五日新城を南郷に構へ、北郷忠直をして之を守らしむ。七月義祐中尾に城きて守兵を置き、同廿日兵を嵩峯に屯し、十一月廿二日野頭に進み、急に南郷新城を攻む。城主北郷忠直新納忠時以下多く戦死し、城遂に陥る。同廿三日義祐

義祐從三位に叙す

肝付兼續

更に飢肥本城を脅かし、十二月十三日、又南郷熊谷城を抜く。守將北郷久幸、大村美濃守、阿多若狹守以下多く戦死す。義祐勢に乘じ、十七日、更に進みて堰尾城○堰に營し、益、侵逼の勢を示す。

大友氏の仲裁

此時、豊後の大友義鑑は、姻戚の好を以て再び島津、伊東二氏の和解を計らんとし、同十七年正月廿四日、使僧眞光寺を日向に遣はす。義祐その舊領三俣院高城を求む。成らず。使者復空しく歸る。忠廣は秘藏の孔雀を眞光寺に托して義鑑に贈り、以てその和議斡旋の勞を謝せりといふ。是に由りて之を觀れば、媾和の事、島津氏より豫め大友氏に依頼せるものならん。會、六月十日、義祐嫡子歡虎丸を失ふ、年僅に九歳。義祐哀惜の情に堪へず、遂に薙髮す。是より世人義祐を稱して三位入道といふ。

かくて同七月七日に至り、義祐又大兵を擧げて飢肥を攻む。忠親八幡馬場に邀へ撃ち、辛うじて之を退くるを得たり。此の役北郷忠茂○山田頭以下戦死するもの甚だ多し。其の後伊東軍は次第に飢肥本城に迫る。當時新山城○星倉村要害最も嚴しく、飢肥本城と相呼應して伊東軍を支ふ。八月八日、義祐堰尾に城きて新山城と相對せしむ。十一月五日、義祐の兵夜に乗じて火を新山城に放ち、飢肥本城との連絡を絶つ。城中入水刑部少輔、來住三河守、平田出羽守等殊戦して之に死す。然れども城遂に陥らず。義祐の兵退く。十二月四日の夜、



伊東軍また新山城を攻む。村田經廉等防戦して之に死す。同じく七日、新山城兵出で、堰、尾を襲ひ、兩軍會戦すること數時、未だ勝敗を分たずして各軍を班す。然るに翌十八年二月廿日、兩軍再び堰、尾の下に激戦す。伊東加賀守<sup>○祐安</sup>殊勳あり。落合新左衛門敵將前田九郎三郎と相刺して死し、稻津四郎、海老原彌七郎等以下戦死す。かくて新山城餓肥本城との連絡絶え、運命旦夕に迫る。忠廣援を島津貴久に求む。貴久乃ち三月十一日、伊集院忠朝<sup>○一に忠明に作るをして</sup>、兵三百に將とし、餓肥を援はしむ。北郷忠相の援軍亦到り、薩軍兵勢大に振ふ。十九日、忠親、忠朝、忠相の三將、相議して中、尾の塞を襲ひ、義祐の兵を業<sup>ごうまい</sup>毎ヶ辻に破る。尋いで、四月二日、薩軍大舉再び中、尾の塞を襲ふ。餓肥、都城の兵は大手よりし、志布志、櫛間、末吉の兵は野頸よりし、未明より午刻に及び激戦數合、薩軍終に中、尾城を陥る。城主伊東治部少輔、稻津四郎左衛門、落合安房守以下士分六十餘人、雜卒二百餘人戦死す。同じく四日、堰、尾の營亦陥り、夜に乗じて兵を高佐に撤し、六日に至り、遂に目井、熊谷、中、尾、鬼ヶ城、郷、原、高佐の六營並びに皆之を棄て、走る。十日、忠朝軍を班す。是に於て、義祐大に地を南方に失ひ、此の後、餓肥の地は暫くその侵襲を免るゝを得たり。

#### 第四節 第五 餓肥役

天文十八年四月十六日、島津忠廣老して忠親繼ぐ。六月十八日、忠廣櫛間に移り、尋いで翌十九年五月廿日、此の地に歿す。

三位入道義祐は、是月上洛して前將軍義晴の喪に會し、幾干もなくして歸る。八月、飛鳥井左衛門日向に來る。義祐、爲に蹴鞠會を催せり。十一月廿六日、義祐の次男虎乘丸<sup>○當時五歳</sup>、都於郡に遷り、加服して義益と稱す。義祐自ら之が後見たり。

當時、義祐佛に奉ずるの心篤く、天文廿年六月、大佛堂を佐土原に建て、十二月廿八日廬舍那佛像を安置す。南都の佛師源五郎兄弟之を鑄る。尋いで又照珪山金栢寺を建て、翌二十一年十月廿八日、大鐘<sup>○此の鐘は文久三年鹿兒島港内に沈む</sup>を鑄て之を寄進す。鐘の銘に曰く、「日薩隅三州大

三州大守の鐘銘

守前惣持永平直翁昭眼大和尚藤原義祐朝臣」と。義祐又僧十人をして笈を負ひて晝夜念佛巡行せしめ、號して海道衆と稱す。或は僧徒をして終日法義を談せしめ、義祐自ら袈裟を着けて之に臨み、殆ど國事を省みず、謗讟の聲四方に起る。時に長倉祐守、稻津重恒、荒武宗並、落合兼仲、佐土原祐章等義祐の執事たり。落合兼仲面を犯して之を諫む。義祐甚だ之を悔ゆ。是より先、彼の綾の亂に加はれる長倉若狹守の弟僧聖瑜、竹篠山西方院に在り。兄



鵜戸僧正

の事を以て稻津重頼を惡み、後、遂に高野山に赴く。義祐の佛に歸するや、切にその歸國を促す。聖瑜乃ち僧實譽をして代りて日向に下らしむ。實譽は元筑前の人、初め竹篠に居り、後、鵜戸に住す。世人呼で鵜戸僧正と云ふ。

既にして、義祐深く佛に淫せるの非を悟り、政を勵み、兵を練り、以て曩日の敗辱を雪がんとす。天文廿二年閏正月十三日、伊東軍大舉餼肥を侵し、八幡馬場に迫る。忠親撃つて之を退く。義祐兵を水ノ尾に次して徐ろに機を待つ。

尋いで同年八月に至り、忠親、永學寺僧某、伊牟田河内守の二人を遣はして和を求め、餼肥東<sup>〇即ち</sup>三百町を義祐に割讓するを約し、和成る。是に於て義祐の家臣長倉兵庫助、落合越後守、野村助右衛門尉、河崎左馬助等、忠親の家臣平山越後守、麥生田兵庫助、上原將監等と鬼ヶ城に會見し、東郷三百町を收む。義祐乃ち鬼ヶ城に番代を置きて軍を班す。然るに翌廿三年十二月廿六日、鬼ヶ城火を失す。餼肥城兵之を望み、急に來りて城を攻む。番代河崎左馬助防戦甚だ努む。既にして援軍七浦より來り、僅に城を保つを得たり。然れども是よりして和復破れぬ。

弘治元年三月、義祐の兵中、尾城を攻め、未だ拔く能はず。七月七日、更に餼肥の兵を誘はんとし、古市、時任附近の稻を刈取る。餼肥兵之を見て新山城に集る。義祐の兵その虛に

目井城

乘じ餼肥本城を奪はんとし、急に二重城戸口に迫る。伊東右衛門佐、山田城主北郷圖書助を獲たり。然れども城堅くして遮に之を抜くべからず、伊東軍乃ち一旦引き去れり。

當時、目井城は海邊の要害にして、新納河内守<sup>〇忠</sup> 餼肥より來りて之を成る。義祐乃ち之を奪ひ、以て鬼ヶ城と共に餼肥を夾撃せんと欲し、是年九月五日、伊東祐梁<sup>〇相模守</sup>をして大舉之を襲はしむ。祐梁乃ち餼肥南郷<sup>〇三</sup>の民舎を焼き、遂に目井城を攻めて之を抜く。城主新納河内守、並びに其の子忠照以下死するもの百三十餘人、此の役落合昌音殊勳あり。

同三年三月十二日、義祐新に東光寺の砦を築きて兵を置き、鬼ヶ城と相應じて餼肥本城に備へしむ。此の時、餼肥本城の兵出で、東光寺、鬼ヶ城兩砦の通路を絶たんとし、遂に進みて東光寺に迫る。城兵撃つて之を退く。尋いで六月十六日、義祐の兵新山城を攻めて之に克ち、忠親の兵勢次第に衰微に歸せり。翌永祿元年十一月、新山城中欺を義祐に通ずるものあり。義祐乃ち同月四日急に之を攻む。忠親弟北郷忠孝等を遣はして赴き救はしむ。忠孝却て利を失ひ、先づ亂軍の中に死す。城中力屈し、守將知覽忠幸<sup>〇梅北地頭</sup>、北郷久信<sup>〇尙久の子</sup>、伊地知美作守、吉田次郎左衛門、山内二郎左衛門<sup>〇庄内財部城の後見</sup>、龜澤豊前等以下戰歿するもの百五十餘人、城遂に陥る。

是に於て、餼肥本城今やその手足を斷たれ、形勢日に非なり。忠親之を憂ひ、その領邑贈



喉郡<sup>大</sup>を島津貴久に獻じ、餼肥の後援を求むること切なり。貴久、乃ち、島津左兵衛佐をして兵三千に將とし、以て餼肥を救はしむ。十二月二十三日、伊東祐梁軍を西山寺に寄せ、餼肥本城に薄り、薩軍と永源寺<sup>○今長持寺</sup>前に戦ひ、且つ退きて板敷田間に誘ひ、遂に奮戦して大に之を破る。援軍の部將檜原長門守、春成兵庫頭、梶原藤七兵衛、上原式部少輔以下十三將相踵いで殞れ、伊東氏の兵威大に揚る。尋いで翌二年六月、義祐重ねて餼肥を撃ち長慶寺に入る。島津尙久<sup>○忠良の第三子貴久の弟</sup>兵を率ゐて先づ來り救ひ、春成久正、島津貴久の命によりて之に踵ぐ。十六日、尙久敗れて殆ど危し。久正自ら尙久と偽り稱して之に死し、尙久僅に身を以て遁るゝを得たり。

かくの如く伊東氏の兵勢愈、當り難く、忠親動もすればその領邑を失はんとす。忠親之を憂ひ、十月、末吉を島津貴久に獻じ、梅北を北郷時久に與へ、更に貴久の次男忠平<sup>○後、義珍と稱し更に改む</sup>を請ひて養子となし、共に餼肥を守りて以て伊東氏に當る。會、是歲十一月十六日、忠親の生父北郷忠相、三保院高城に歿す。忠相驍勇にして能くその境域を守り、以て伊東、北原、新納、本田の諸氏をして、一指を之に染むるなからしめぬ。常に法三條を定め、讒者は死罪に處し、謀叛は死妻子に及び、小科は寺預り三日を限る。人と爲り能く諫言を容れ、兵器を整へ、以て武備を修む。今や邊疆多事の時に際し、溘然として逝く。島津氏の爲に多大の損失たりしなり。

忠相歿す

大の損失たりしなり。

### 第五節 肝付兼續の勢力及第六餼肥役

南北朝以降、大隅地方の一勢力たりし肝付氏は、其の後暫く顯るゝものなかりしが、此の頃又漸く勢を復し、動もすれば島津氏を圖らんとす。永正三年、肝付兼久高山城<sup>○肝付を以て島津忠昌に叛く。八月六日、忠昌之を伐たんとす。新納忠武志布志より來りて兼久を援く。忠昌利あらず。十月十二日軍を撤す。同十七年八月朔日、兼久の子兼興、島津忠朝の領せる申良城を攻め、城主平山近久撃つて僅に之を退く。然るに大永四年九月二十九日に至り、兼興復申良城を攻めて遂に之を陥れ、島津忠吉<sup>○季久の庶孫</sup>を殺す。此の役、志布志の新納忠勝、島津忠朝の約に背きて陰に兼興に聲援を與ふ。忠朝之を含み、後、天文五年八月十一日、餼肥の兵志布志を撃つ事あり。</sup>

其の後天文十一年三月晦日、忠廣<sup>○忠朝の子</sup>肝付氏の領蓬萊を攻め、援を北郷忠相に求む。忠相乃ち次男忠孝を遣はし、忠廣と共に鹿野原<sup>○大に肝付氏と戦ふ。然れども肝付氏の勢力益、加はり、兼興の子兼續<sup>○省鈞と號す</sup>に至りては、高隈、百引、平房、大崎、安樂、蓬原、恒吉等を保ち、</sup>



肝付氏と伊東氏の結託

又 伊東義祐の女を娶りて威を四隣に振ふ。會兼續、貴久と諧はざる事あり。兼續の族益丸兼持○大崎郷益丸城主亦、貴久の國老伊集院忠朗を含む事あり。天文十六年、兼續遂に伊東氏と結び、自ら大隅を略せんとして貴久に叛す。義祐亦之を利して、同年二月二十三日、餓肥進撃を行へり。その後、兼續一旦歸服せしが弘治二年二月に至り、再び島津氏に畔き、志布志を襲ふと稱して伊加倉忠兼を大崎に誘ひ、その虚に乗じて忠兼の本城○いさひのうまやくらわ百引厩郭を攻めて之を破る。此の秋忠兼山田忠朗を促し、大舉して兼續の族益丸兼持、及び其の子兼寛を龍相城○大崎郷に攻む。兼續兵八千を以て兼持を救ふ。時に、島津忠親、忠兼を救ふを約して未だ之を果す能はず。忠兼、忠明以下戦死するもの五百餘人、肝付氏の兵勢大に振ふ。是に於て八月十七日、忠親來りて大崎に兼續を攻む。兼續城外に逆へ戦つて利あらず。その部下三百餘人を失ふ。兼續乃ち城に入り、堅く守りて出でず。忠親空しく軍を班す。尋いで永祿元年三月、兼續鋒を轉じて莊内○日向を襲ふ。北郷時久○忠親の子出で、之を禦ぐ。島津忠親、日置久範、平田宗仍、同宗徳等を遣はして時久を援はしむ。同月十九日、兼續時久と宮ヶ原○大隅國恒吉郷大谷村に戦ひて大に之を破り、北郷久厦○時久の叔父、同久親及び忠親の遣將久範、宗仍、宗徳、石坂久武等を斬り、兵勢大に張る。其の後十月二十三日、兼續復志布志を攻め、忠親撃つて之を退く。翌二年四月、忠親平山忠智をして松山城を守らしむ。十四日、忠智志布志

に赴き、遂に兼續の軍と遭ひ、力戦して死す。兼續遂に松山城を奪ふ。忠智の二子久武、久次亦城に殉す。

肝付、伊東軍の餓肥進撃

かくの如く、肝付氏は、世、島津氏に對捍を續けしが、今や伊東氏の勢力隆々として揚り、將にその深仇島津忠親を屠らんとするを見、與に力を協せて餓肥、櫛間を夾撃せんことを計るに至る。永祿三年春、義祐は新山城の守備を嚴にし、目井城を根據として櫛間に進み、火を沿道に縦つ。兼續は兵を高山茶磨ヶ城に居ゑて、亦共に櫛間を窺ふ。忠親乃ち前後に勁敵を受け、勢殆ど窮す。是より先、忠親貴久に請ひて、その子忠平を養子とすべきを約せしかば、三月十九日、忠平兵を率ゐて餓肥に入る。是に於て、義祐、兼續、共に一旦兵を撤す。然るに是歲六月二日、幕府○義輝將軍たり島津貴久に内書を與へ、伊東氏と和せしめんとす。近衛植家亦幕府の命を傳へて和平を説く。九月四日、幕使伊勢備後守貞孝都於郡に來り、義祐に傳ふるに和親の事を以てす。義祐謝し且つ答へて曰く、南北兩朝分争の際、祖信濃守○祐光都城に殊勳あり、將軍尊氏賞するに奥三國を以てす。其の後將軍義政の時、下野守○祐光名代として京師に在り。其の子新五郎兵部少輔に任じ、京師の御番となる。今や島津氏鴟慾を擅にし、濫りに來りて我が疆域を侵す。願はくば之を復して和平を保つを得んと。是に於て十月四日貞孝末吉に至る。貴久如きて之に見ゆ。貞孝命を傳へて曰く、餓肥は島

幕府及び近衛家の仲裁



津、伊東二氏爭奪の地なり。故に爾後之を以て幕府の直隸となすべし、吾聞く、餼肥の地に伊東の舊地ありと、宜しく之を返して和を結ぶべしと。九日貴久、北郷時久、新納忠元、樺山幸久、肝付兼盛等をして對へしめて曰く、和議の事謹みて命を奉せん。然れども、伊東の采邑餼肥に在りと稱するは義祐の誣言のみ。故に斷じて之を割くべからずと。貞孝の執事川井豊前守曰く、曩に之を伊東氏に聞く、餼肥莊内の地は其の舊領なり、且つ將軍義政伊東氏に授くるに三國の守護を以てすと。如何。幸久答へて曰く、三國守護職は始祖忠久之を頼朝に受けしより、未だ曾て之を斷たず。伊東氏は僅に獨り都於郡に宰たるのみ。然れ共義祐にして退きて其の境を守らば、餼肥を以て直隸となさんこと、忠親未だ命を奉せずと雖、貴久強ひて之に従はしめんと。貞孝乃ち斷じて曰く、宜し。若し義祐にして飽くまで命に抗し、退きて其の境を守らざれば、則ち西國の諸侯に命じて之を伐たしめんと。貴久乃ち右馬頭忠將を以て之を謝し、貞孝等をその旅舎に饗す。既にして貞孝歸洛す。然れども、餼肥の地、終に直隸たらず。和議亦成らず。二氏の交戦此の後益、激甚を極む。蓋し伊東氏侵逼の氣勢愈、鋭く、遂に幕府の命を奉せざりしに依るなり。

### 第六節 第七 餼肥役

永祿四年五月十四日、肝付兼續大隅廻城○今福山、廻城、居城を陥る。薩軍來りて之を復せんとす。既にして、島津忠親餼肥より出で、之に會せんとし、高原山に陣す。兼續之を義祐に告ぐ。義祐、乃ち大兵を發して鎌倉に營し、將に餼肥、酒谷兩城の通路を斷たんとす。忠親驚きて軍を旋す。兼續勢に乗じて高原山、馬立二城を屠り、兵勢益、張る。尋いで、七月十二日、薩軍大舉廻城を攻めて克たず。部將島津忠將、同忠林以下、死するもの五十餘人、貴久自ら麾下の兵を以て之に當り、辛うじて兼續の軍を破る。兼續、伊地知重興、禰寢重長等と共に末吉に走り、廻城復せらる。

然るに一方義祐は、次第に軍を進めて餼肥を脅かし、また使を忠親に遣はして諭す所あり。當時、伊東氏の兵鎌倉に屯し、餼肥、酒谷の通路殆ど絶え、忠親急を貴久に告ぐと雖、貴久、肝付氏に遮られて來り援ふことを得ず。是に於て忠親策の出づる所なく、終にその鎌倉の陣を撤するを條件として伊東氏に和を講ず。十二月廿一日、義祐、忠親の使者清武圓目に會し、宮敷城を義祐に割讓することを約す。晦日、義祐約に従ひて宮敷城を收め、守兵を置く。

廻城の攻撃



飢肥城開く

然れども、義祐の飢肥に對する野心は、之を以て休むべきにあらず。同五年二月に至り、義祐再び肝付氏と相牒し、大舉して飢肥を夾撃す。忠親之を防ぎて連りに敗れ、十日飢肥本城遂に守りを失し、酒谷城、また尋いで陥る。茲に至りて忠親、復施すに策なく、終に志布志を肝付氏に委して、義祐に降り、養子忠平○後義弘亦鹿兒島に還る。義祐、乃ち、忠親を櫛間に遷し、忠親の二老臣日置周防介○忠亮、柏原宮内少輔に南郷三百町の地を與へて共に之を善遇し、家臣福永宮内少輔、上別府常陸守を以て飢肥本城の守備に任ず。是に於て、多年伊東氏の垂涎措く能はざりし飢肥城、初めてその掌中に歸し、山東の地今や全く之を戡定するを得たり。

既にして流言あり、福永等日置、柏原を南郷に襲はんとすと。二人晏如たる能はず。同年六月、南郷を出で、櫛間に奔り、忠親に投じ、忠親と共に報復の機を窺ふ。會、義祐眞幸方面に多事なるを機とし、九月、忠親飢肥を恢復せんとし、日置忠亮、深見主水、高橋四郎左衛門、種田大膳亮、柏原宮内少輔等を遣はして飢肥に迫る。此時、飢肥の守兵交替の期に際し、福永宮内少輔以下多く都於郡に歸り、城中守兵甚だ寡し。十七日夜、忠親の兵四千餘人、楠原、松尾門口より本城に薄る。城代上別府常陸守以下殊戦して之に死し、城陥る。義祐急を聞き、木脇越前守○祐守をして酒谷城を援はしむ。祐守未だ至らず。十八日、酒谷城

忠親飢肥を復す

亦降る。茲に至りて新山城以下伊東の守兵皆守を棄て、逃れ去り、忠親再び飢肥を復するを得たり。廿二日、島津貴久使僧を遣はして忠親を賞美す。義祐飢肥を占有すること僅に五閱月なり。

### 第七節 眞幸方面に於ける伊東島津、相良三氏の交渉

伊東義祐は、連年兵を飢肥に出して島津氏と相挑みしが、更に一方眞幸院主北原氏の内政にも容喙し、延いて相良、島津二氏との衡争をも惹起せり。

北原氏と眞幸院

北原氏は、肝付氏の支族にして、眞幸院七百五十町○吉田、馬關田、加久藤、飯野、三ツ山の領主たり。眞幸院は古へ日下部氏之を領し、建久の初、日下部重兼あり。重兼より傳へて五世貞房に至り、北原右兵衛佐兼 幸之に代りて眞幸を領し、飯野城に居る。是を北原氏の祖となす。其の後頼兼に至り、更に吉松、栗野、横川を併せ、範兼、久兼、兼興、貴兼に至る。貴兼四子あり、寛兼、兼門、立兼、兼珍といふ。寛兼、兼門共に早く歿す。尋いで貴兼歿するに及び、兼門の子茂兼幼弱なるを以て叔父立兼繼ぐ。立兼文明十七年、第二飢肥役に伊東祐國に従ひて楠原



に戦死し、茂兼繼ぐ。然るに叔父兼珍倨傲にして遂に自立して眞幸を領す。長享二年二月茂兼球麻に奔り、外戚相良頼泰に投じ、頼泰の女を娶りて兼泰を生む。兼泰兼親を生む。眞幸院に於ては、兼珍の後、久兼、祐兼相承け、兼守に至る。兼守伊東義祐の二女を娶る。

義祐の容喙

義祐是より北原氏の内政に干與し、殆どその領邑に臨むが如し。既にして、永祿三年兼守三ッ山城○今小林に歿す。子なし。義祐三ッ山に至り、北原氏宗族と共に議して後を立てんとす。衆望多く民部少輔に歸す。義祐之を排し、馬關田右衛門佐を立て、兼守の室○義祐の女を醮せしめ、三ッ山城に置く。尋いで義祐民部少輔を殺し、同四年十月廿四日、兵を飯野の内長善寺に出して不逞の徒を撃ち、同五年春に至りては、北原氏の領邑眞幸院を初めとし、栗野、横川、高原等、殆どその版圖に歸す。

是より先、茂兼の孫兼親は、再興を計らんとして、眞幸に歸り居たりしが、茲に至りて再び球麻に奔りて相良氏に投ず。高原、竹崎の地頭白坂下總介、踊城主白坂佐渡介○二人共に難を避けて島津貴久に屬し、栗野、吉松、馬關田等亦相續いで貴久に歸す。かくて北原氏の舊領は、今や四分五裂し、伊東、島津、相良三氏の角逐分争に委するに至れり。

永祿五年五月、樺山幸久白坂下總介等と謀り、兼親を迎へて北原氏を繼がしめんとし、之を貴久に討る。貴久之を賛す。乃ち由を兼親に告げ、且つ兵を相良頼房に求む。頼房之を諾

し、直に兵を出して馬關田城を襲ひて之を抜く。尋いで徳滿城主北原八郎右衛門尉等、兼親に應ず。十日○五兼親飯野城に入り、眞幸院を復す。然れども、三ッ山以東未だ降らず。宮路某は栗野に據り、北原伊勢介は横川に據りて共に伊東氏に應ず。貴久乃ち自ら兵を勸して溝邊○大に屯し、伊集院忠朗、樺山幸久を横川に遣はし、伊勢介を招降せしむ。伊勢介應せず。六月三日、貴久子忠平○後ち、義弘歳久を遣はして横川を攻めしむ。新納忠元、伊集院久春之が後軍たり。城中遂に力屈し、伊勢介その子新助と共に自刃し、城陷る。尋いで栗野亦白坂下總介に降る。幸久兼親に勸めて、栗野、横川を貴久に献せしむ。兼親之に従ふ。

然るに、當時、伊東氏は、飯肥を攻めて遂に之を陥れ、意氣甚だ熾んにして形勢頗る憂ふべきものあり。是に於て是月○六廿一日、貴久の老臣伊集院忠朗○入道、孤舟、肝付兼益、北原兼親、相良頼房の老臣深水頼金○右、馬助、北郷時久の老臣北郷忠徳等、白鳥○今、西諸縣郡に會し、艱難與に相救はんことを盟約す。會、同年九月、島津忠親伊東氏の虚に乗じて、一舉直に飯肥を復し、島津氏の兵勢復振ふに及び、同六年二月、貴久兵を飯野に進め、十日、伊東氏の兵を三ッ山に撃ちて之に克ち、兼親をして再び眞幸を領有せしむ。兼親深くその再造の恩を謝し、是より伊東氏と斷ちて島津氏と結ぶに至り、曩に排撃互に休む時なかりし北郷氏とも、此の後和親を修むること、なれり。尋いで相良氏北郷氏と誓書を交換して緩急相救はんこと

北原氏と島津氏との結



を約するに及び、六月四日、島津貴久亦書を相良氏に遣り、北原兼親のその舊領を復するを得たる、一に相良氏の力によると賞揚せり。蓋し島津氏は多年伊東氏の侵寇に苦めるもの、今や北原氏の内難に乘じ、之を拯ひて恩を賣り、又遙に相良氏と盟約を堅うして、以て與に伊東氏を抑へしめんとするなり。是れ即ち曩に伊東氏が大隅に於ける肝付氏を搖かして、島津氏を圖らしめしと同一轍なり。かくて眞幸方面一時靜謐に屬せしが、幾干ならずして再び騷擾を醸すに至る。初め、大河平隆屋世、大河平城に居り、北原氏の黨たり。

大河平氏

大河平氏は、菊池氏の支族なり。五郎隆俊初め八代氏を稱し、後、十二傳して越前守隆屋に至り、大河平氏に改む。

隆屋、北原氏の騷亂に當り、島津忠平に降る。隆屋の子隆充、隆充の子隆次、相繼いで大河平城を守る。義祐來りて城を攻む。隆次幼弱、撃つて之を退く。忠平之を賞するに、鍋、灰塚、榎田の三所を以てし、又大河平城と相對して今城を築き、隆次をして之に居らしめ、戍兵三百を置く。然るに、同七年五月、北原兼親隆次と隙あり。忠平に言つて曰く、飯野、今城相距ること遠からず、今城急難あるも飯野の兵を以て救ふべし、二城並に戍兵を置くは徒らに冗費を要するのみ、如かず、今城の兵を撤せんにはと。忠平之を然りとし、今城

相良氏の野

の戍兵を撤せしむ。義祐之を聞き、急に來りて今城を攻む。城主大河平隆次及び叔父隆堅以下九十餘人戰死して城陷る。義祐亦其兵五百餘人を失へり。

是より先、相良氏は眞幸に獲る所あらんことを期し、北原兼親を送りて飯野城に入れ、兵を留めて之を成らしむ。島津氏の戍兵飯野城に入るの後と雖、尙ほ留まり、其の後、兼親の栗野を以て島津氏に獻するに及びて初めて引き去れり。

當時、兼親の伯父左衛門尉吉松城主たり。私に伊東、相良二氏に通じ、飯野の薩兵を屠らんとし、事露はれて出奔す。兼親の族人北原八郎右衛門尉○德滿城主、白坂與一左衛門尉○下亦後難を恐れて眞幸を去り、兼親孤立す。而して相良氏の壓迫其の後益加はり、兼親殆ど自立する能はず。貴久之を憂ひ、遂に兼親を伊集院神殿村に移し、忠平に眞幸院を與へて以て伊東氏に備へしむ。忠平乃ち眞幸に徙り、加久藤城○小山村を築き、又飯野城を修理し、十一月十七日、忠平飯野城に入り、夫人廣瀬氏を加久藤城に留む。是の日、兼親神殿村に移る。

然るに、其の後、九年十月に至り、義祐壘を三ツ山に築き、須木領主米良筑後守を守將となし、兵を聚めて將に飯野城を襲はんとす。十一日、貴久の嫡子義久、書を肝付兼盛に移して先づ忠平を援はしめ、尋いで義久出で、自ら將となり、忠平、歳久を従へて、廿六日、



三ッ山城に迫る。城兵善く戦ひ、薩軍死傷相繼ぎ、忠平、亦傷きて病甚し。是に於て、義久遂に兵を收めて空しく還れり。

かくの如く眞幸地方は、伊東、島津、相良三氏の角逐場と化し、干戈息む時なく、伊東氏の勢力動もすれば島津氏を凌がんとす。貴久乃ち、同十年春、坊之津一乘院住僧を御崎寺に遣はし、和を義祐に謀る。義祐、亦、使僧安宮寺を薩摩に遣はし、伊集院大和守と會見して和を議せしむ。然れども、二氏互に相疑ひて、遂に和親の實なく、後年此の地方に於て一大衝突を演出するに至る。

### 第八節 第八 飢肥役

義祐は、曩に忠親の爲に、不意に飢肥本城を復せられしを遺憾とし、再び之を奪ふべく、永祿六年八月十九日、大兵を擧げて瀬平、東光寺、鬼ヶ城に營し、廿日、外、浦を襲ふ。時に琉球、支那の商船、外、浦に泊す。義祐の兵、船に到りて錦欄、段子等の織物を購ひ、之を弓槍に懸けて還る。飢肥の兵路に之を要し、八社明神前に撃ち、鹽津留越に克つ。伊東勘解由左衛門、落合源左衛門兼永等走りて目井の池城に據る。城中に河野長門守なるものあり。

外ノ浦役

廿二日の夜陰に乘じ、脱出して海に洩ぎて大島に至り、七生島なつはなを経て急を鬼ヶ城に報ず。城兵徑に來り救ひ、目井城僅に無事なるを得たり。

同七年正月廿日、伊東兵再び鬼ヶ城に軍容を整へ、三月十四日、酒谷城に迫り、十六日、更に新山坊追城郭外に戦ひ、荒武十郎二郎以下所謂十八人組皆鬪死す。

かくの如く、伊東氏の飢肥に逼ること益急なるを以て、貴久憂慮措く能はず。十一月十九日、都城なる北郷時久忠親の子に盟書を與へ諭して曰く、永く盟好を修して替る勿れ、若し飢肥に難あらば、當に三ッ山を撃つて以て之を救ふべしと。

同八年二月七日、伊東の兵板敷間田に戦ひ、十九日、新山外屋とや尾に進み、三月廿四日、楠原に陣し、五月朔日、飢肥の兵と新山外屋尾に戦ひ、遂に新山城を降し、守將日置忠光を殺す。

是歲、義祐北河内前山に砦を築き、守兵を置き、鬼ヶ城と相寄りて以て飢肥を脅かす。當時、義祐飢肥、眞幸に連年兵を動かし、領内諸城の戍兵交替頻繁なるを以て、時人之を廿日番と嘲稱し、武夫は奔命に勞れ、黎民は賦税に苦み、怨嗟の聲四方に聞ゆ。同九年三月廿二日、義祐の兵目井に陣し、四月廿日、忠親の兵と宮、浦の海上に戦ひ、義祐その兵船五隻を失ふ。五月廿四日、忠親櫛間の兵を發して、義祐の兵と飢肥に戦ひ、未だ勝敗を判

廿日番



たす。然るに六月十七日、彼の肝付兼續の子良兼○大隅菱刈に居る、兵を岩川に進めて島津氏を侵す。北郷時久の兵之と戦ひて、互に殺傷あり。七月十日、良兼進みて櫛間に逼る。時久又忠親を援ひて飢肥に赴き、肝付氏の兵利を失ひ遂に退き去れり。

尋いで同十年正月下旬、義祐更に新山城に兵備を修し、益々飢肥に迫る。五月朔日、忠親釋迦尾野、廣木田に伏を設けて伊東の兵を破り、之を耳田に追撃し、將に之を抜かんとす。會、其の將柏原宮内少輔義祐の臣外山相左衛門の銃撃する所となりて斃れ、部衆潰散し、義祐僅に耳田を保つを得たり。義祐、乃ち、相左衛門を賞するに青銅一萬疋を以てすといふ。

### 第九節 第九飢肥役及び其の占領

永祿九年六月、大隅國菱刈に據れる肝付良兼○兼續の子、兼續永祿九年に歿し、繼立す。伊東氏と結びて島津氏を侵す。是に於て同十年十月廿五日、島津氏の兵三ツ山を攻むるの後、轉じて菱刈に逼る。十二月、良兼援を義祐に求む。時に義祐野尻に在り、急に佐土原に歸り、廿八日、諸將を會して軍議を開き、明年正月を期して兵を飢肥に進め、陣營を篠嶺に布くに決す。故に今、

俄に肝付氏の求めに應ずること能はず。翌十一年正月九日、義祐自ら兵二萬に將として佐土原を出で、その日水ノ尾に次し、十一日、鬼ヶ城に諸軍を會し、十三日、篠嶺に着し、湟渠を鑿ち、城廓を構へて此處に陣す。伊東祐基總大將たり。肝付良兼之を聞き、亦自ら城を出で、共に飢肥を夾撃せんことを謀る。是に於て都城主北郷時久は、一族忠増、久盛、久藏等をして、兵六千に將とし、酒谷に陣して以て飢肥の外援たらしむ。此の時に當り、大隅國の舊族菱刈隆秋、大口城を本據として島津氏に叛し、遙に相良氏の後援を恃みて勢あり、島津義久○貴久の子之が討伐に專にして、ために飢肥を來り援ふの邊なし。義祐、乃ち、諸軍を部署し、伊東祐梁に三千八百人を附して新山に陣し、以て飢肥本城に當らしめ、落合兼永、木脇祐武に一萬一千人を附して、小越の南に陣せしめ、長倉祐竝、川崎主税に三千二百人を附して亂櫛尾らんしびに陣せしめ、別に二千六百人を以て遊軍となす。廿一日、時久、忠親と期を約して、伊東軍を夾撃し、大に之を破る。忠親は池田兵部左衛門、若松新三郎等を失ひ、祐基は落合兼永、上別府新三郎、阿萬彌太郎、荒武帶刀、小山田將監等を失ふ。既にして、飢肥城中糧食乏しく、忠親援を時久に乞ふ。二月廿一日、時久糧を飢肥に送り、忠親の兵と合して一萬三千餘人、阿田、越に屯す。飢肥城兵之を大迫口に迎へんとして竹野に至る。祐基之を要して、兩軍大に小越、阿田越及び竹野○小越の西に激戦し、忠親、時久の軍大敗

菱刈氏と相良氏



し、北郷忠俊○山田城主、土持頼綱○末吉城主、和田匡郷○勝岡城主、其子助六、財部盛稔○高城城主、上田久周○志和池城主、本田親豊、柏原常陸守○酒谷城主以上八百餘人を失ふ。時久酒谷城に在り、敗報に接して深く心に決する所あり。伊東軍は勝に乗じて酒谷を脅かし、櫻、馬場に至り、篠ヶ嶺に凱旋す。然れども、飢肥本城なほ未だ降らず。密に之を探るに、城兵細砂礫より鍵浦を経て莊内を交通するなり。伊東軍乃ち細砂礫に陣し、鹿柴を結びて以てその通路を絶つ。五月、祐基更に酒谷城を圍む。時久僅に自ら保つのみ。力飢肥を援ふ能はず。飢肥本城今や全く孤立して外には外援の望絶え、内には糧食殆ど盡き、剩へ忠親病衰日に加はり、將卒又鬪ふの勇なく、歿落の運方に旦夕に迫る。

是に於てか、島津義久は、もはや飢肥の救ふべからざるを知り、遂に同五月下旬、北郷忠徳をして須木に至りて米良筑後守と議し、和を義祐に計らしむ。乃ち忠徳は酒谷に、筑後守は篠ヶ嶺に至りて共に和を説き、兩人霧島山麓に再議の上、六月六日、筑後守酒谷に赴きて議漸く熟し、忠親は飢肥南郷を伊東氏に、櫛間を肝付氏に割き、且つ山之口城主北郷源三郎を質となし、義祐は落合四郎左衛門、湯池出雲守を質となすを約して和茲に成る。八日、忠親其子朝久と共に一旦酒谷に退き、尋いで都、城に退き、篠池に隱る。かくの如くにして、文明十八年島津忠廉の帖佐より遷りてより方に八十三年、島津氏の雄

飢肥城遂に陥る

鎮として山東に重きをなせし飢肥城は、累年伊東氏の侵逼に堪ふること能はず遂に降り、此の後永く伊東氏の領有に委することゝなれり。天文十年、義祐初めて兵を用ひてより茲に廿八年なり。是に於て、義祐飢肥一千町を以て次男祐兵たぢに與へ、飢肥に居らしむ。世に飢肥殿と稱す。又祐梁に三十町を與へて今城に置き、以て祐兵の副となし、木脇祐守に二十町を與へて松尾に置き、佐土原祐賀よしに十町を與へ、稻津重信に九町を與へ、其の他落合藤七に七町を、長倉監物、野村劍介、上別府狩野介、湯地刑部少輔、荒武又兵衛、河崎紀伊守、壹岐右近丞、福永與八郎等に各六町を與へて、以て執事となす。又、長倉淡路守を酒谷城に、河崎駿河守を目井城に置いて地頭となし、特に落合但馬守、長倉備前守に各六町を與へて酒谷の後見となす。是より先永祿五年、義祐家督を義益に譲りしが、こゝに至りて義祐自ら佐土原に居り、都於郡を以て本城となし、義益をして之に居らしむ。後、上別府常陸守、福永宮内少輔の二人を以て飢肥の地頭職となし、更に領内各地の守備を配置し、城主三十九、領主七を定む。城主は城壘あるの地を領するもの、領主は城壘なきの地を領するものを云ひ、佐土原、飢肥を加へて世に四十八城主と稱す。

三十九城主

三十九城主

三納 飯田肥前守



穂北 長倉藤七、後、民部少輔と改む、其子藤七

富田 湯地五郎九郎、後、志摩介と改む

高城 野村藏人佐

財部 落合民部少輔、幼名藤九郎、其子藤九郎

那賀 郡司彌六左衛門尉、次に湯地出雲守、宇津宮左馬助

宮崎 肥田木勘解由左衛門尉、次に長嶺紀伊守、肥田木越前守

曾井 八代民部左衛門尉、後、下野守と改む

清武 長倉伴九郎、上別府宮内少輔

紫波洲崎 河崎上總介、次に其子和泉守

田野 長倉河内守、次に其子宮内大夫

倉岡 野村隱岐守、次に同山城守

石塚 平賀刑部少輔

穆佐 落合兵部少輔

木脇 福永民部四郎

本庄 河崎兵部丞

八代 伊東新三郎、後、新助と改む、隱岐守の子

守永 内田四郎左衛門尉

綾 佐土原遠江守

飯田 河崎治部大輔

内山 野村刑部少輔

漆野 漆野志摩介

紙屋 米良主税助

野尻 福永丹波守

高原 福永源左衛門尉、淡路守の子

戸崎 肥田木四郎左衛門尉

三ツ山 平良彦十郎、後、遠江守と改む、其子亥十郎

那佐木 肥田木三郎兵衛尉

野久尾 米良筑後守、次に新納伊豆守

須木 米良長門守、幼名右馬介

新納石 長友源次郎



鹽見 右松四郎左衛門尉

門河 米良四郎右衛門尉

日智屋 福永新十郎、次に氏本駿河守

山陰 米良喜内、幼名彌二郎

坪屋 米良休助、次に松尾下總守

酒谷 長倉淡路守

目井 河崎駿河守

瀬平 上別府常陸守

七領主

田代三方 篁尾彦三郎 俣江主税助

水志谷 奈須九右衛門尉

入下 入下彌四郎、田爪某

神門三方 小崎右近將監

高智尾 (輪) 三鉢惟政之を世襲す

雄八重 米良分左衛門尉

平野 米良民部少輔

當時款を伊東氏に通ずるもの、肝付、彌寝、伊地知、新納、本田、北原、瀧、東郷、入來院、祁答院、菱刈、相良、米良の十三族あり。伊東氏の武威四隣を壓し、名聲遠近に震ふ。蓋し此時を以て其の極盛時と稱すべし。



### 第二章 肝付氏の衰運と伊東氏の没落

#### 第一節 木崎原の役

伊東義祐既に飢肥を占領して、山東の地全くその版圖に歸したれば、これより愈、力を眞幸方面に專にし、島津氏と衡を争ひて、以て前敗の耻を雪がんと欲す。茲に於てか、島津氏は益、疆界を嚴守して之に備へんとし、是歲○永祿十一年六月十五日、島津義久○貴久の子北郷時久に書を與へて益、盟約を堅くし、時久、亦、肝付良兼と結びて其の後援を求む。

〔北郷氏系圖〕

#### 起請文

- 一、如承候、世上何様之雖爲轉變、向後聊疎儀有間敷事。
- 一、就善惡、讒者讒言毎々有之習候歟。決實否、可爲一味之心緒窮頼母敷候。此旨同意之事。
- 一、雜說之時者互可被披合事。

#### 若此趣旨有違犯者

奉始上、梵天帝尺四大天王、下、堅牢地神、大日本國六十餘州三千餘社、殊者當國鎮守等開門正一位、諏方大明神、別者隅州惣社正八幡宮、霧島六所權現、稻荷大明神、天滿大自在天神部類眷屬等、可蒙神罰冥罰者也。

仍起請文如件。

永祿十一年六月十五日

義久(花押)

#### 北郷左衛門入道殿

是より先、島津領内には内難突發し、菱刈隆秋なるもの兵數千を擁して薩摩大口に據り、遙に相良、澁谷諸氏の聲援を恃みて、勢ひ甚だ熾んなり。義久、乃ち、一族忠長、肝付兼盛、新納忠元○武藏守等をして之を攻めしむ。克たず。是歲五月、義久山野の地を與へて相良氏と和し、又菱刈氏をも慰撫せしが、八月に至り菱刈氏復叛し、堂崎に城きて之に據る。義祐乃ち機乗すべしとなし、遙に之に聲援を與へ、兵を桶平○一名田原と云ふ飯野城の南一里にありに屯し、將に島津忠平○後義弘の據れる飯野城を襲はんとす。加久藤、馬關田の農民皆伊東氏に屬す。義祐陰に間使を球麻に遣はし、相良氏に告げて曰く、我今、桶平に屯して將に飯野を襲はんとす、然れども勢ひ先づ加久藤を陥れざるべからず。因りて軍を桶平より柿木の故壘に移さんと

菱刈相良二氏と伊東氏



大河平氏

す。請ふ、卿、軍を大明司壘に出し、共に犄角の功を成さんと。使者球麻人皆越六郎左衛門の邸に宿し、使命を私語す。六郎左衛門は大河平隆次の姉婿なり。密に使を馳せて由を遠矢良堅○下に告ぐ。良堅之を忠平に告ぐ。忠平乃ち中野越前守、伊尻神力坊等をして急に大明司壘を守らしむ。相良氏竟に敢て兵を發せず。既にして六郎左衛門義久に降る。義久之に大河平を興へて隆次の後とし、改めて左近將監隆俊と稱せしむ。

十月、義祐の兵猶ほ桶平に在り。十一月、義久遠矢良堅、黒木播磨等を將とし、本地原○反野城と田原山との中間に在り、方一里に伏し、別に數兵を出して伊東軍を誘はしむ。伊東軍之を追うて本地原に至れば、則ち伏忽に起り、夾撃して之を破る。

義益の頓死

かくて兩軍對陣中に年暮れ、翌十二年○永祿七月十一日、伊東氏に於ては當主義益、三財村岩崎稻荷祠に參籠し、社内に頓死するの凶事あり。是に因りて同月十四日、義祐桶平の守兵を撤す。

義益歿年廿四、子義賢○慶龍丸甫めて三歳、義祐復國事を視る。

曩に、島津氏に抗せし相良、菱刈二氏は、是年○永祿正月、出水郡野田の感應寺に頼りて和を求む。廿日義久之を許す。然るに三月十八日、蒲池越中守平和泉○平に赴かんとして大口城を過ぐ。相良氏の臣深水頼兼不意に襲ひて、越中守及び其の從者十七人を殺す。是に由り

相良菱刈二氏の歸服

て和復破れ、八月十八日、義久、貴久と共に大口城を攻む。球麻、八代の兵、大口城を守るもの三百、戸神尾の會戰に失ふ所其の半ばに及び、勢ひの遂に守る可からざるを覺り、相良頼房、大口を義久に獻じ、菱刈氏をして平城を領せしめんことを乞ふ。義久之を許し、廿六日、菱刈鶴千代○重猛○子に本城、曾木院○共に平を領せしむ。九月十日、頼房、相良帶刀、深水太郎左衛門尉を以て質とす。義久、亦、鎌田政廣、本田新介を以て質とす。尋いで十八日、貴久大口城に入り、新納忠元を以て大口地頭とし、牛屎、菱刈兩院の地を領せしむ。一方菱刈氏は同じく是歲五月廿二日、北郷小十郎、義久の命を受けて兵を率ゐて之を征す。九月菱刈氏義久に降る。相良頼房書を北郷時久に致して祝意を表す。

〔北郷家譜〕

菱刈方依ニ取亂、一兩年不慮之防戰、無ニ是非ニ候。然者島津殿次御入魂、菱刈家可レ被ニ相殘ニ之由承候。大慶之至候。向後如ニ代々ニ可ニ申談ニ外、不レ可ニ別儀ニ候。就レ夫至其表御出頭之由候間、爲ニ禮儀ニ用ニ使書ニ候。猶期ニ來信ニ候。恐々謹言。

九月七日(永祿十二年)

頼房(花押)

北郷殿 御宿所

翌元龜元年正月には、澁谷氏、亦、降り、隈城、百次、平佐、碓山、高江、高城、水引、西方、湯



田、宮里、京泊、清敷等の地を献す。

かくの如く、島津氏の内患稍薄らぐの時に當り、元龜二年六月十二日、北郷忠親都城篠池に歿し、同廿三日、島津義久の父貴久亦逝き、島津氏一門の不幸相繼げるに、剩へ、由來島津氏と相協はざる肝付氏亮兼亮は、伊東氏との結托益深く、動もすれば鉾を島津氏に加へんとす。是に於て、同年十月、北郷時久は室老北郷紀伊守、和田起雲齋等を鹿兒島に遣はし、速に肝付氏を撃たんことを議せしむ。果然、十一月廿日に至り、肝付氏は禰寢、伊地知諸氏の軍を合して兵船百餘艘、急に鹿兒島を脅かし、轉じて帖佐龍ヶ水を攻む。守將平田新三郎等奮戦して之を禦ぎ、僅に之を卻くるを得たり。更に翌三年正月十九日には、肝付氏の水軍大隅小村を襲ふ。守者之を禦ぎ、岸良將監等廿四人を斬りて、辛うじて其の地を保つを得たり。

島津氏領内の動搖斯の如きの時、伊東氏争でか此の好機を逸せんや。義祐は曩に木場幸に城き、祐安をして之を守らしめしが、更に密使を球麻の相良よしあき義陽お修理大夫に馳せて、共に飯野を襲はんことを約し、愈、元龜三年五月、一族祐安、新次郎祐梁の子、又次郎掃部の子及び落合源左衛門尉をして、兵三千を率ゐて三ッ山小林小に入らしめ、牒者を死苦村に放つて地形の險易、道程の遠近を察せしむ。四日拂曉、祐安、妙現の尾に陣して飯野城に備へ、新次郎、又次

加久藤城攻撃

郎等の別軍轡を勒し枚を衝み、飯野城下上江村を過ぎ、進みて加久藤城に向ひ、火を附近の民屋に縱ちて直に城背に肉薄す。當時、加久藤城には、忠平の夫人廣瀬氏及び老臣川上忠智あり。飯野城兵、火を望みて驚き、急を忠平に告ぐ。忠平乃ち直に兵を部署し、遠矢下總に一隊を授けて先づ赴き救はしめ、五代友慶等の一隊を白鳥山麓野間門木崎の南の民家に伏して背面の襲撃に備へ、村尾重候源左衛門の一隊を本地原木崎の東の舊壕内に伏して、其の歸路を断たしめ、又別に一隊を二八坂大明司山の東にして飯野城の西十九町に在りに留めて敵軍の動靜を監視せしむ。更に相良氏の援軍を慮りて、旗幟を諏訪山飯野城の西一里強に横尾八幡山飯野城の東南二十八町餘に樹て、擬兵となし、有川貞眞等を留めて飯野城を守らしめ、忠平自ら手兵數十騎と共に本道より馳せて加久藤を救ふ。既にして伊東軍、加久藤城背の難路鎌掛口より將に本丸に突入せんとす。恰も徳泉寺口の背後に當り、山伏樺山淨慶の邸宅ありて、城の外郭に彷彿たり。天未だ明けず。故に伊東軍誤つて先づ之を攻む。淨慶父子三人、奮闘して之に死す。城將川上忠智死兵を提げて突出し、防戦ただ努む。伊東軍その多寡を知る能はず。乃ち退きて飯野川の南に至り、列伍を亂し、甲を脱して水に浴し、多くは薩兵を輕んじて、敢て之に備ふるなし。忠平は、是より先、進みて加久藤の後方遠見塚に到れば、伊東軍既に加久藤を去るの報に接す。乃ち二八坂より南に轉じて木崎原に向ひ、吉松よりの援軍と合して急に伊東軍

伊東兵飯野川に浴す



を夾撃す。伊東軍奮闘して之を退け、故道を避けて白鳥山○木崎原の南一里半に在りに登り、更に三ッ山林○小に出でんとす。蓋し、飯野に備へあるを聞けばなり。白鳥權現社座主光嚴警鐘を鳴らして土民三百餘人を聚め、險に據りて伊東軍を支ふ。伊東軍山上に登ること能はず。轉じて南木場○桶平の西、白鳥山の東に在り、亦小林に出づるの道なりに赴く。林中に白衣の兵數千ありて、其の進路を遮る。是れ旗幟を以て兵に擬せるものなり。伊東軍其の實を知らず。驚き還つて木崎原○飯野郷今西村の中央に在りに至る。兵未だ三千を下らず。吉松、加久藤の兩軍、衆寡敵せざるを知り、觀望して敢て進まず。忠平二八坂より杉水流○二八坂の南、今に在り、遙に之を望見して憤激に勝へず、馬を奔らし、孤軍深く木崎原に入る。布陣未だ整はず。伊東軍大に悦び、伊東又次郎、落合源左衛門等前馳して岡を下り、急に之を撃つ。忠平敗れて退くこと數十歩、三隅田○飯野城の西南一里餘に止まりて激戦す。忠平復殆んど危し。既にして援軍到り、鎌田尾張守は末永より、鳥越山を踰えて狐疑原に出で、五代友慶は野間門より進みて、共に伊東軍の腹背を衝く。忠平勢を得て前面より驀進し、加久藤、吉松の兵亦之に激せられて並び進み、島津軍兵勢頓に振ふ。伊東軍乃ち退きて狐疑原に屯し、島津軍と激闘して克たず、終に潰走す。此の時、伊東軍失ふ所、伊東新次郎、同祐安○加其の子同源四郎、同又次郎○帶部、同右衛門佐○祐安、同左衛門尉、上別府甚四郎○宮内、落賀守

相良氏の撤兵

合源左衛門○山東總奉行、長倉伴九郎、米良筑後守、野村四郎兵衛尉、北原又八郎、肥田木四郎左衛門尉、米良式部少輔、同喜右助、長嶺彌四郎、佐土原八郎兵衛、稻津又三郎、持原甚左衛門、其の弟越中守福永四郎兵衛、後藤九郎左衛門尉以下精銳二百五十餘人。殘兵悉く三ッ山に向つて走る。忠平輕騎を將ゐて北ぐるを追ひ、鬼塚原に至る。柚木崎正家○丹槍を揮つて忠平を衝いて獲す。比田木玄齋等と共に戦死す。飯野村民争ひて饘粥を齎して島津軍を稿ふ。粥餅田の名稱此の時に始まるといふ。忠平軍を班して横尾に至る。此の役、相良義陽、兵五百を以て伊東軍を援ひ、彦山に到り、南の方飯野を望めば、木崎原より白鳥山に至り白旗野を蔽ふ。乃ち思へらく、薩州の大軍飯野を救ふなりと。遂に遁れ還る。初め忠平の飯野を發するや、火を揚げて大口の諸城に報す。新納忠元之を望み、兵を率ゐて吉松より木崎原に向ふ。遂に伊東の敗兵に遇ひ、之を掩撃して伊東右衛門、同權之助、長倉四郎兵衛以下百六十餘人を獲たり。是に於て伊東軍の失ふ所總て五百餘人、島津軍の失ふ所亦殆んど三百人に及ぶ。此の戦役たる、實に日向に於ける島津、伊東兩氏の争覇戦と稱すべく、其の勝敗の、此の後兩氏の盛衰に關はる所、極めて大なるを知るべきなり。



## 第二節 肝付氏の衰運及伊東、肝付兩氏の疎隔

木崎原役以前に於ける肝付氏不穩の状態は、既に之を説けり。其の後肝付氏は、益々兵勢を張りて島津氏を窺ひしが、伊東氏木崎原に一敗地に塗れ、爲に乗すべきの機を逸しぬ。肝付氏の不逞斯の如くなるを以て、木崎原役終るや、九月、義久北郷時久を遣はして之を伐たしむ。時久乃ち肝付氏の領邑月野、泰野を撃つて之を破り、又別に梶山城兵を發して、肝付氏の領邑櫛間の兵を撃たしめたり。

然るに、翌天正元年正月六日、肝付兼亮大軍を率ゐて末吉を侵し、橋野に陣す。末吉地頭土持頼綱、梅北地頭知覽大和守、急を北郷時久○一雲に報す。六日、時久其の二子相久、忠虎○彈と住吉原に邀へ撃ちて大に之を破り、肝付修理亮、同左兵衛尉、伊集院三河入道等三百五十餘人を斬獲し、北ぐるを追ひて松山城に至りて還る。是より肝付氏の勢頓に衰ふ。然れども與黨ねじま彌重長○彌重、伊地知重興○垂水等猶其の地に據りて對捍を續く。義久時に早崎に營す。亂徒の速に歸降せざるを患ひ、是月、寶持院及び八木昌信を遣はして彌重長を勸めて肝付氏と絶たしむ。重長命を聽く。是に於て新納忠元、上原尙近、伊集院久治等兵

彌重長  
伊地知  
重興  
等

を率ゐて彌寢城に入る。三月十日、義久薩隅の兵を出して彌寢氏と共に肝付氏を攻めしむ。時久○北郷之に従ひて平松に陣す。義久は自ら揖宿に陣して之が聲援を爲す。十四日、義久の兵肝付軍を撃つて利あらず。早崎の高洲に至り、漁船を奪ひて還る。十八日、進みて西俣に至り、征久○島津忠、忠長○島津等、肝付の大軍と奮戦して之を却く。然るに七月廿四日、肝付氏の兵急に來りて早崎の營を襲ふ。島津家久力戦して僅に之を却く。義久重長を從へて鹿兒島に歸り、厚く之を遇す。重長滯留數日にして歸る。肝付氏はより深く彌寢氏を衞み、遂に兵を出して之を撃つ。重長横尾に逆へ戦ひ、肝付氏の兵五十餘人を獲たり。當時、肝付氏の家臣安樂備前守牛根城を守る。十二月十四日、義久の諸將之を攻め、進みて平常岡に屯す。是に至りて、肝付加賀守佐土原に赴き、援兵を乞ひて曰く、救ひ若し至らずんば、且に島津氏に降らんとすと。義祐之を諾す。

二年○天正正月三日、肝付氏の兵先づ來りて牛根城を救ひ、高隈山を越えて將に茶園○牛根ヶ尾○牛根を奪はんとす。島津忠長、川上久信等之を争ひて克ち、遂に茶園ヶ尾に據り、河岸に沿ひて路を作り、牛根城に達せしむ。三日にして成る。守將安樂備前守終に降を乞ひ、弟彦八郎を質とし、城を出で、肝付に歸る。廿日、新納忠元代りて城に入る。是より先、伊東義祐は、伊東權頭を遣はし、肝付、伊地知の諸軍と會して牛根城を救はしむ。途にして薩兵既



に茶園ヶ尾に陣し、地の利を得たりと聞き、空しく還る。然れども、十九日轉じて禰寝を攻め、其の村落を焼く。喜入季久之を禦ぎ、弟忠通、久續等戦死す。伊東軍失ふ所百餘人、遂に引き去る。是に於て義久家久を留めて早崎を成らしめ、廿七日鹿兒島に歸る。

然るに是歲七月廿三日、秋雨滂沛として休まず、諸陣帷幕を垂れて寂寞たる夜、肝付の兵密に城背の樵路を度りて早崎を襲ふ。城中事不意に出で、殺傷數を知らず。家久突出して自ら數創を蒙るも届せず、遂に撃つて肝付の兵を退く。此の後、伊地知重興は、勢窮し、地を島津氏に献じて降を乞ふ。義久之を許し、下城○下大隅五ヶ所の内今垂水に屬すを重興に與ふ。

肝付兼亮は、伊地知氏既に島津氏に屈伏し、伊東氏の後援、亦深く恃む可からず、勢ひ孤立して事の爲し難きを覺り、廻り市成を献じ、罪を謝して降る。尋いで多年入來地方に豪居せし入來院重豊、亦誓書を上りて貳なきを示すに及び、隅州始めて平定し、島津氏の兵威是より愈熾なり。是に於て、島津義久は、其の一門宗族の結束を益堅からしめんとし、是年九月十日、北郷時久に誓書を與へ、伊集院忠金○後ち忠棟、平田昌宗、村田經定、川上意釣等亦之に倣ひ、尋いで十一日、忠平○島津更に時久に誓書を與へ、以て伊東氏に對する警戒を益嚴にすべきを諭せり。翌三年○天正正月、義祐○伊東櫛間、志布志の兵を促すや、廿八日、莊内より之を義久○島津に報ず。義久乃ち大隅新城、禰寝等を戒嚴す。

肝付氏の歸

兼續の室御南

初め、肝付兼續三子あり、良兼、兼亮、兼護といふ。良兼伊東義祐の女高城を娶る。女あり、男なし。兼續、良兼共に歿するに及び、兼續の室御南○日新公良兼の女良兼の女を以て兼亮に妻はし、以て肝付氏の嗣たらしむ。是に至りて、兼亮一旦島津氏に歸すと雖も、又陰に伊東氏に通す。御南思へらく、此の子家を保つの主に非すと。之を逐ひて少子兼護を立て、兼亮の妻を取つて之に妻はす。

曩に兼亮の歸服するや、義久、兼亮をして櫛間を領有せしむることとの如し。島津朝久○忠親の子憚ばずして曰く、櫛間は吾が舊領地なり、奈何ぞ之を他人に與ふるやと。兼亮御南の逐ふ所となるに及び、朝久人を遣はし、本田親治、上井覺兼に頼りて櫛間を求む。義久許さずして曰く、兼亮出亡すと雖も、肝付氏猶ほ存し、奉公貳ならず、奈何ぞ其の邑を奪はんやと。尋いで十一月十一日、御南、高城牧瀬宮内少輔を遣はし、伊地知勘解由、上井覺兼に頼りて兼護を立てんことを請ひ、且つ復、伊東氏と親を爲さることを約す。即ち十二月七日、肝付氏の室老藥丸出雲入道孤雲、飯熊山別當及び巖龍寺の二人を遣はして、絶を伊東氏に告ぐ。肝付治部左衛門高城を奉じて志布志に處る。是に於て、義祐○伊東は河崎駿河、同紀伊をして輕兵百餘を率ゐ、高城を取らしむ。十三日、河崎等櫛間に向ふ。藥丸孤雲拒いで納れず。乃ち去りて志布志に至れば、備へあり。又入ること能はず。退いて波

肝付伊東二氏の絶縁



見村に屯す。廿三日、河崎駿河衆を引きて去る。

かくの如くにして、肝付、伊東二氏の交驩、復、舊の如くなる能はず。四年六月に至り、肝付兼護の兵、飢肥南郷を襲ふ。飢肥○祐兵之の兵出で、之を禦ぎ、斬獲する所多し。是よりして二氏永く絶つに至る。十月朔日、兼護又兵を出して飢肥に寇す。克たず。其の兵三百餘人を失ふ。是に於て、伊東兵の逆撃を憂ひ、十日、島津征久、喜入季久、伊集院忠棟、鎌田政近等、往いて櫛間、志布志を成る。是よりして二邑終に島津氏の有に歸し、肝付氏愈、衰へ、領する所の諸邑大崎、串良等の地、往々にして島津氏に逆へ降る。

是より先、義久、北郷時久に約するに、肝付氏平ぐの後は、其の邑志布志を賞賜せんことを以てす。是に至りて、時久に志布志を與へんとす。伊集院忠棟可かず。乃ち恒吉、永吉、内之浦百八十町の地を以て之に授く。尋いで、十一月十八日、義久下大隅に如き、新城、鹿屋、串良、大崎を経て志布志に至り、留ること數日、櫛間に赴き、普く新附の地を巡り、十二月廿一日、鹿兒島に歸れり。

かくて累年、伊東氏と結びて島津氏に挑み、勢ひ猖獗を極め、彼の島津忠昌をして清水城中に憤死せしめ、右馬頭忠將をして廻城畔めぐりに屠腹せしめし肝付氏も、是に至りて全く衰滅の悲運に陥り、此の後復顯はるゝなくして止みぬ。翌五年二月、義久は串良院岡崎名上園

肝付氏の衰  
滅と其の影  
響

門を興國寺○忠昌に附し、以て忠昌の冤魂を慰めたり。

肝付氏の衰滅は、島津氏の爲には、不斷の内患を除き、伊東氏の爲には、有力なる外援を失ひ、其の兩氏の勢力消長に關與する所極めて大なるものありき。彼の肝付氏と提携して亦島津氏を窺ひし相良氏○義が、是歳三月八日、遙に義久に書を寄せて邊境の平定を祝賀し、且つ永く隣好を修せんことを請へるが如き、能く此の間の消息を示すものと謂ふべし。

良兼の室高城は、其の後伊東家に歸り、都於郡没落の際、義祐父子に後れ、都於郡照覺院に潜み、後杉田瀧之助宗盛に再醮す。兼續の庶子に修理入道三省あり。其の家衰滅の後、大隅に隠れ棲み、後飢肥に來り、南郷脇本村金蓮寺に住し、又飢肥城内に住み、更に談義所○舊は常眞馬場に在りに移住して世を終れりと傳ふ。

### 第三節 伊東氏の没落

伊東義祐は、木崎原敗戦後、銳意邊備を修め、一族伊東勘解由を高原城○霧島山麓高原村に置きて島津氏に備ふ。伊東兵霧島祭禮の日に當り、屢、出で、大窪田口の兩村を侵し、祭祀を妨ぐ。島津忠平義久に告げて之を伐たんことを乞ふ。四年○天八月十六日、義久乃ち鹿兒島を發し



飯野に入る。北郷時久の子忠虎之に従ふ。十八日、義久忠平を先鋒とし、歳久を左軍、家久を右軍、征久を殿軍となし、飯野を發し、花堂村に入り、十九日黎明、高原耳附尾に進み、高原城に逼る。城兵出で、小河内口、地藏院口に戦ふ。鋭鋒當るべからず。義久乃ち策を運らし、其の水路を斷つ。城中大に困む。此の夜、義久營を花堂村に移す。廿日、義祐の援軍猿瀬野尻野に來り、敢て進まず。廿一日、義久、家久、忠長と鎮守尾城高の西に屯し、城を圍むこと益、嚴なり。城主伊東勘解由遂に力届し、比多木河内守を使となし、伊集院久宣、木田親治、上井覺兼に頼りて和を義久に求め、落合豊前、比多木河内を以て質となす。廿三日、勘解由城を献じて去る。義久乃ち城に入る。

米良氏

當時、須木城に米良重矩あり。世々加江田郷地福六町を食む。是より先、義祐之を奪ひて寵臣伊東歸雲に與ふ。重矩深く之を怨む。是に至りて遂に三ッ山、須木を以て義久に降る。義久乃ち鎌田政年或は川上忠兄に作るをして三ッ山を、宮原景種をして須木を守らしむ。是に於て八城高原、高崎、三ッ山、内ノ木場、悉く島津氏に屬す。

尋いで廿五日八義久野尻を襲はんとして跟瀬くすに至り、一旦軍を還し、廿八日、高原より三山に如き、三山を忠平に托して飯野に赴く。是日、相良義陽復物を贈りて高原の戦捷を祝す。九月三日義久、室老上井兼覺を時久北郷に遣し、高原の戦功を賞し、且つ問ふに田

野城を降すの謀を以てす。十日、義久上原尙近を以て高原地頭となし、鹿兒島に歸る。義祐は、是より先、兵を退けて野尻、戸崎二城を成り、以て島津氏の東進に備へんとし、福永丹波守を野尻城に置き、伊東大炊介を以て之が監たらしむ。然るに福永丹波守は、其後問者の讒構に因りて義祐の惡む所となり、義祐に見ゆることを得ず、且つ其子藤十郎元服を加へて初めて登城するも、義祐亦之を見ず。是に於て丹波守義祐を銜み、竊に欸を高原城中に通す。

義祐の不人望

當時、義祐驕慢益、甚しく、秕政屢、行はれ、伊東歸雲獨り權を弄し、羣臣怨望す。而して一人の之を諫諍するものなし。偶、都於郡、佐土原城下に落書をなすものあり。曰く、今や文武弛廢し、綱常紊亂し、寔に伊東氏社稷危殆の秋なり。法元はふが郎二、平島新左衛門殿助、平野伊賀守後藤、猪股左衛門、關屋左衛門の徒、君側に在りて不義を營み、士庶共に困惑す。殊に伊東歸雲政道を過り、國力を殺ぐこと甚しく、國老野村吉次、幼弱其の器に非らず、徒らに員に備はるのみ。早く是等元兇を除き、軍國の事、専ら伊東大炊介、佐土原攝津守、落合若狹守等に任すべし。寧ろ都於郡、佐土原を棄つるも、飢肥を嚴守するの勝れるに若かず。今女謁盛に行はれ、事皆賄賂請托を以て成る。最も寒心すべきの時なり。宜しく審かに之を察し、深く警めざるべからずと。而も義祐恬然として顧みず。五年天正月門川



城主米良四郎右衛門、其の侍童高妻孫三郎を怒ることあり。孫三郎奔りて縣の土持氏に倚る。二月九日、土持の兵三百來りて門川城を襲ふ。城兵撃つて之を退く。翌廿日、再び城を攻む。既にして潮見、山陰、日知屋の諸城兵、報を得て來り救ひ、門川祇園、馬場に於て大に土持軍を破る。義祐、祐兵と共に自ら佐土原を出で、軍を日知屋に進めしが、事已に平ぐを以て、四郎右衛門等に賞賜して歸城す。

曩に肝付氏の衰滅により、櫛間地方悉く島津氏の邑となる。義祐深く之を遺憾とし、祐兵と共に之を得んことを謀り、兵を出して櫛間を襲ふ。六月十九日未明、伊東軍湊村を屠り火を四方に放つ。島津忠長書大軍を以て申良より、疾馳し來りて伊東軍を衝く。伊東軍爲に潰敗し、死傷相踵ぐ。木脇越前守、一隊を率ゐ、山麓を環りて退き、扇の徽號を閭外に樹て、擬勢を張る。薩軍之を望みて踟躕逡巡す。伊東軍之を以て僅に免るゝを得たり。

八月、義祐佐土原に老し、嫡孫義賢慶龍丸十一歳繼ぐ。永祿十二年、義益早世してより此に九年。義祐後見たり。然れども義祐既に民心を失ひ、家運日に非なり。九月廿八日夜、彗星坤に顯はれ、光鉞月の如きもの四十日。國人相望みて、以て凶兆と爲す。

此の時に當り彼の野尻城福永丹波守は、終に高原城主上原尙近の誘ふ所となり、野村備中守國老野村吉次の父三女は丹波守の室と共に陰に内應を約す。義祐其の貳心を察し、子藤十郎を取りて質とす。

義賢の繼立

丹波守之を患ひ、踟躕決せず。尙近乃ち、反間書を爲り、之を丹波守に與ふ。伊東大炊介之を得て、私に義祐に示す。義祐乃ち、羣臣を會して丹波守を誅せんことを謀る。野村備中守、夜密に之を野尻城に報す。十二月七日、丹波守遂に叛し、使を上原尙近に遣はして告げて曰く、當に今夜を以て城を致すべしと。恰も尙近嚙啖郡に赴き、未だ還らず。朝倉某等之を飯野諸城に報す。竹内備前乃ち先づ兵六十餘を率ゐて新城野に入る。丹波守迎へて之を勞す。野尻本城の軍士山下彌右衛門、黒木宮内左衛門等、もと内應を約して未だ果さず。竹内備前之を責むるに及び、二士門を開きて薩兵を納る。既にして忠平島飯野より來る。伊東の戍兵三百餘入城を棄て、奔り、野尻城遂に島津氏の有に歸す。八日、薩兵戸崎城野尻を攻む。守將漆野豊前逃れ去る。紙屋地頭米良越後守室は野村備中守の二女迎へ降る。義祐時に佐土原に在り。變を聞き、自ら兵を率ゐて紙屋に進む。野村、福永の與黨所在に蜂起して火を其の後に縱つ。義祐歸路を斷たれんことを恐れ、乃ち佐土原に還る。然れども人心既に離畔し、國內鼎沸、復、收攬すべからず。諸城の守兵悉く潰散して、又、一人の伊東氏の爲に闘ふものあるなし。九日、忠平進みて富田城に迫る。守將湯地出雲守、亦迎へ降る。忠平勝に乗じて進み、勢ひ破竹の如く、將に都於郡を衝かんとす。義祐羣臣と會議し、遂に先づ難を米良に避け、然る後、豊後大友氏に頼るべきを決す。蓋し、義祐の子



義益の室阿喜多夫人は、土佐國一條房基の女にして、大友宗麟の妹某の生む所なればなり。此日、義祐、祐兵、近臣數十人と佐土原を出で、北の方新田（にうた）に走り、人をして道を財部に假らしむ。財部城主落合藤九郎之を拒みて曰く、臣魯鈍と雖も亦一城の主たり。然るを君常に臣を侮慢し、且子丹後罪無くして戮せらる。恨み實に淺からず。然れども、是れ皆嬖臣歸雲（伊）の爲す所なり。歸雲を誅せば、則ち謹みて命を奉せんと。義祐將に自刃せんとす。左右之を止む。會、義賢、弟祐勝、阿喜多夫人、阿虎（義益の女、年十三、後に松壽院といふ）、其他一門、都於郡を遁れて新田原に義祐に會するあり。穂北城主長倉洞雲齋、其の子藤七郎と共に義祐等を迎へて其の邑に入らしむ。義祐等乃ち一、瀬河を渡り、富田原を過ぎ、穂北に至る。十日拂曉義祐の一行（一門歴々百餘人、驛卒許多）、穂北を出で、米良山中に入る。此日大雪、稜寒肌を劈き、崎嶇たる山道險惡名狀すべからず。夫人以下足を破りて、鮮血淋漓たり。元より輿馬の通するなれば、衆皆徒歩蹣跚として相扶掖して往く。妾婢等多くは隨ふこと能はず、路傍に自刃し、哀哭の聲谿谷に響く。既にして薩兵の追躡し來るものあり、中尾村（米良）の人的場安光之を尾泊に防ぎ、落合兼教父子亦追兵を拒ぎて之に死し、義祐以下僅に免るゝことを得たり。十一日、椎八重の内松八重に至りて一泊し、十二日、雄八重に着し、米良兵庫の家に宿る。兵庫は世々米良を領し、兼て款を義祐に通ずるものなり。故に一行を遇すること甚

一行米良山中に入る

米良兵庫

だ篤し。此の行素より倉卒に出でたれば、一人の財貨を携ふるものなし。僅に近侍御子（このか）方なるもの、帛帶數條を纏ひて出で、途すがら民家に入り、之を解きて食に換へ、以て一行をして餓えざらしむるを得たり。十三日、義祐等松八重、祝谷を経て遠智ヶ谷に至る。先づ二卒を出して宿舍を求めしむ。途に土寇に遇ひ、一卒僅に遁れ歸る。衆皆死を決して進む。偶、一空舎の有るあり。乃ち入りて息む。雨雪霏々として終日休まず。夜寒殊に甚し。牀を剥ぎて薪に代へ、火を圍みて旦を待つ。從者皆甲を着け白刃を手にし、舍邊を護りて終夜寝ねす。十四日、神門村に至る。奈須祐貞（右近將監）は義祐恩顧の士なり。故に欺待到らざるなく、一行初めて蘇生の思をなす。十六日義祐等神門を出で、中八重、塚原、狩底、内江、桑内諸村を経て、廿五日、河内に着す。義祐乃ち使者を大友宗麟の許に派し、其の返報を待つ。留ること十餘日、遂に此地に年を踰ゆ。

奈須祐貞

抑、都於郡の没落、事不意に出で將士皆後る。其の跡を追ふもの、多くは途に反者の殺す所となり、或は居城に據りて節に死す。伊東大炊介（祐）は本莊に、飯田肥前守（祐）は三納に、木脇越前守は櫛間に、其弟八郎左衛門は志布志に、門川四郎左衛門は高岡に、海野藤十郎は飲肥に、都甲常陸守は潮見に死す。而して伊東氏の所謂三十九城中、高城地頭野村源五を始め、節を屈して島津氏に降るもの相前後す。獨り飯田城主河崎治部大輔城に據て屈せ



す。後、久しくして開き去る。目井城主河崎駿河守は、外浦より海上上、口に着し、豊後に走る。日知屋城主福永新十郎、門川城主米良四郎右衛門、潮見城主右松四郎左衛門、山陰城主米良喜内の如き、皆伴りて島津氏に降り、陰に恢復の機を待てり。

島津氏諸將  
を配備す

是に於てか、島津氏は、新附の諸城に其の宿將を配置し、以て其の地方を警備せしむ。比志島宮内を清武に、上原尙近を飲肥に、伊集院下野を櫛間に、新納縫殿、桑良原狩野介を酒谷に、大寺大炊を田野に、鎌田長門を垂水に、吉利下總を潮見に、野村加賀を紫波州崎に、伊地知伊賀を日知屋に、伊地知丹後、吉田若狹を門川に、伊集院美作を曾井に、上井伊勢を宮崎に、山田新助○有信を高城に、川上忠智を財部に、平田新左衛門、伊集院肥前を穂北に、鎌田出雲を都於郡に、島津家久を佐土原に、平田狩野介を木脇に、川上備前を本莊に、新納近江を富田に、甲斐長門、同右京を高知尾に、伊地知民部、同式部を三納に、吉田右衛門を山陰に、各、配置して並びに其の地の地頭と爲す。

土持氏の修  
好

翌六年正月二日、縣城主土持親成、その族土持榮續を鹿兒島に遣はし、舊好を修せんことを請ふ。義久之を許し、廿五日、親成に石塚の地百餘町を加附し、榮續に御手洗村十町を與へて之を賞す。是月、義久又島津朝久に宮崎三百町を領せしむ。朝久飯野に忠平に近侍し、家臣日置忠充をして宮崎を守らしむ。二月九日、義久本田親成、上原尙近を以て飲肥

嘜あつかひとなす。十四日、義久日向清水名の地五町を鞍馬寺に寄進し、以て後昆の福祿を祈る。

此日更に山田有信○新助を高城○新納院地頭とし、川上忠智○三河守を財部○高鍋地頭とし、益守備を嚴にす。

顧みれば、中世以來常に對峙の勢をなし、三州に覇を争ひし島津、伊東の二氏、飲肥占領に因りて伊東氏の武威頓に揚り、島津氏をして一時其の鋒を收むるの已むなきに至らしめしが、三位入道の驕慢度を失し、民心離悖、禍機内に發し、島津氏の爲に一舉其の本據を衝かれ、一門相率ゐて米良の窮地に窘蹙し、敵をして遂に三國守護の實を成さしめたり。



日向國史上終

昭和四年十二月十五日印刷  
昭和四年十二月二十日發行

日向國史上卷 奥付

著作  
所權有

著作者

東京市小石川區東青柳町十番地

喜田貞吉

發行者

東京市麻布區宮村町十番地

山本啓三

印刷者

東京市神田區表猿樂町十五番地

稻留甚平

發兌元

東京市麻布區  
宮村町十番地

電話音山五八二五  
振替東京三四六八五

史誌出版社















